

あげ みぞ こう こ ふん
上溝 11号古墳

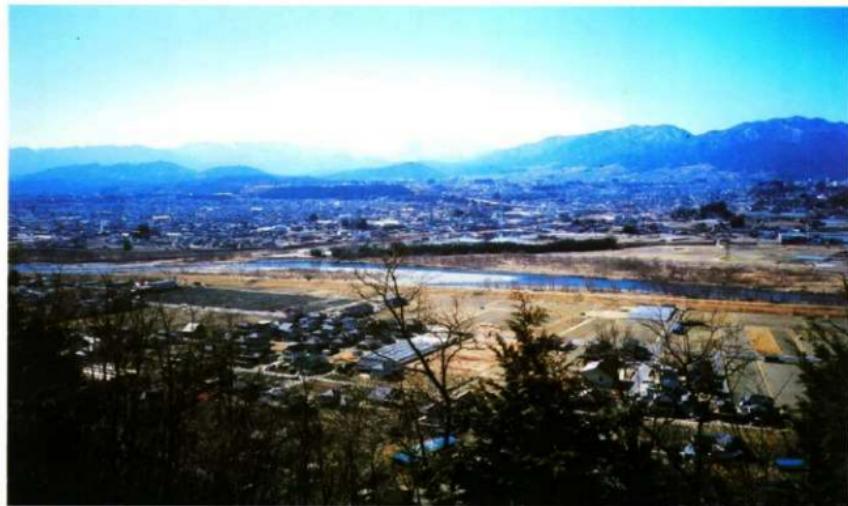
2004年3月

長野県飯田市教育委員会

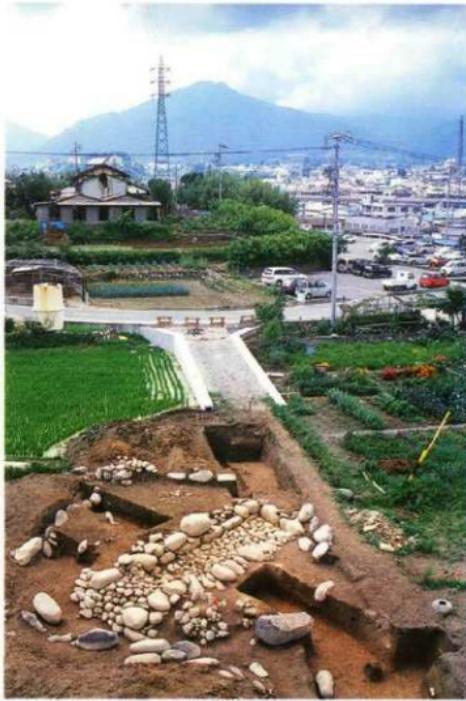
あげ みぞ ごう こ ふん
上溝11号古墳

2004年3月

長野県飯田市教育委員会



遺跡遠景（天竜川東岸より望む）



上満11号古墳 全景



橫穴式石室 遺物出土狀況



西側壁 トレンチ土層



東側壁 トレンチ土層



玄室中央西側壁際出土裝飾付大刀



DSC00630



DSC00631



DSC00632



DSC00633



DSC00634



DSC00635



DSC00636



DSC00637

装飾付大刀の銀象嵌拡大写真



玄室内出土遺物

序

飯田市は、美しい自然に恵まれ、長い歴史と尊い伝統文化に包まれた人情豊かなまちとして知られ、伊那谷の中心都市として躍進しています。これまでの調査により、3万年あまりもの昔から人が暮らした土地であることが確認されています。今回発掘調査が行われた松尾地区は、市内でも文化財の多いことで知られています。とくに県宝指定の眉庇付冑が出土した妙前大塚古墳をはじめとする数多くの古墳は、当地が古来より栄えていた土地柄であったことを現代に知らしめています。

このような埋蔵文化財は、一度壊すと二度と元通りにすることはできません。できる限り現状で保存し次の世代に遺すことが最善といえます。しかしながら、次善の策として発掘調査を行い記録保存することによって、後世に伝えるのもやむを得ないことと考えております。

この度の発掘調査により、未発掘の横穴式石室が確認されました。古墳の多いことで知られる飯田市ですが、その多くは明治期に発掘されており、詳しい記録が残っていないのが現状です。今回のような石室の調査事例は少なく、当時の墓制を知る上で欠くことのできない資料となりました。また、銀象嵌の装飾が施された刀をはじめとするきらびやかな副葬品は、往時の隆盛を思い浮かばせてくれます。願わくはこの度の調査結果が地域の歴史構築の一助となるとともに、歴史と文化財が身近に感じられるようになれば幸いです。

最後になりましたが、現場・整理作業に従事された作業員の皆様に、甚大なる謝意を申し上げる次第であります。

平成16年3月

飯田市教育委員会

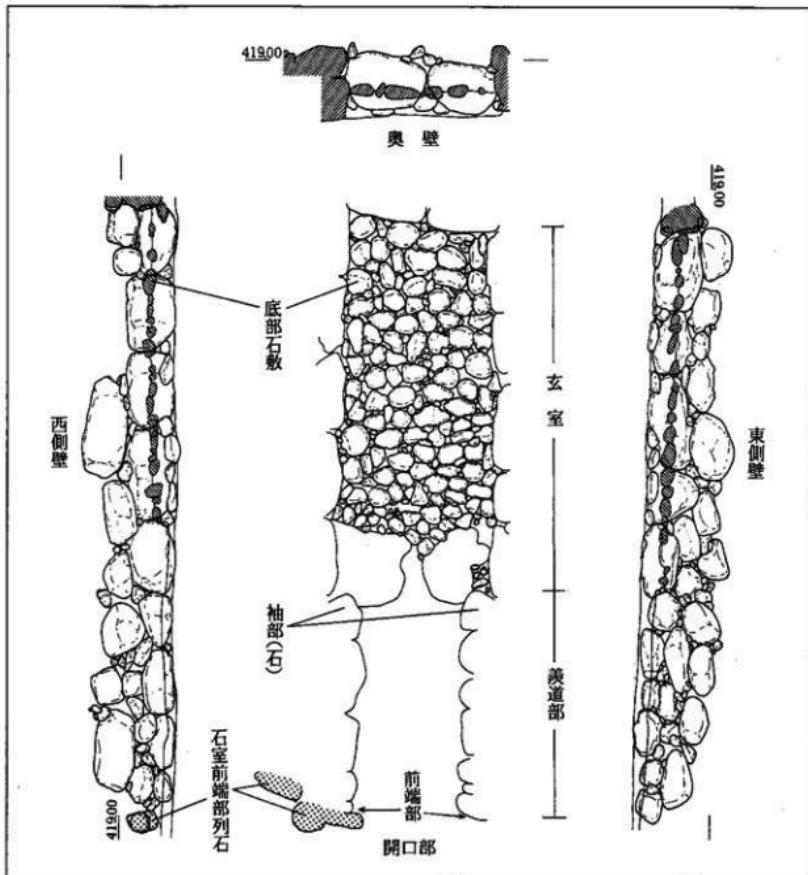
教育長 富田泰啓

例　　言

1. 本報告書は、農地造成および宅地開発に伴い国・県の補助を受けて実施した飯田市松尾3329・3327-2所在の埋蔵文化財包蔵地上溝11号古墳の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は飯田市教育委員会の直営事業として、平成14年度に実施し、平成15年度に整理作業および報告書の刊行を行なった。
3. 上溝11号古墳における発掘調査位置は国土基本図の区画、VII-L C85 12-4に位置し（社団法人日本測量協会 1969 「国土基本図式 同適用規定」参照）、グリッド規定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、㈱千代エンジニアに委託した（本文挿図3参照）。なお、石室内部については、これとは別に石室主軸に沿った1m四方の任意グリットを設け、調査を進行した。
4. 発掘調査及び整理作業には、上溝11号古墳はAGMK11の記号を用いた。
5. 今回調査地点の隣接地（松尾上溝3335）において集合住宅建設に先立つ試掘確認調査を実施しており、一部本古墳の周溝を確認していることから、参考として周溝確認部分（文中、試掘トレンチ）を記載した。
6. 報告書の記述にあたって、以下のとおり調査時とは異なる名称・番号を用いている。
トレンチ1を北西側調査区、トレンチ2を南東側調査区、石室主軸に直交するトレンチ3・4を墳丘東西トレンチとした。遺物については、地点を把握したものには番号を付したが、整理作業時の接合等により欠番となったもの、小破片のため掲載していないものがあることから、調査時の番号は用いていない。
なお、炭化物・骨については調査時の番号を用いている。
7. 土層観察については、小山正忠・竹原秀男 1996「新版標準土色帖」による。
8. 遺物観察表の寸法の記載は、欠損等により計測不可なものは「-」、推定可能なものは「()」とした。
なお、遺物の色調について、土器類は「新版標準土色帖」、ガラス玉は講談社刊「日本語大辞典」の色名解説による。
9. 本書の記載は、遺構・遺物図版は挿図とし、遺構・遺物写真は巻頭カラーと巻末に一括した。
10. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により濱谷恵美子・羽生俊郎が行い、本書の執筆は、第I～III章、第IV章2節5、第V章第4節4(1)は羽生、それ以外は濱谷、最終的な加筆修正・総括を小林正春が行った。
11. 出土した金属製品の一部は、財団法人 元興寺文化財研究所に保存処理・分析を委託し、遺物写真撮影については、西大寺フォト 杉本和樹氏に委託した。また、石室石材・雲母については、飯田市美術博物館学芸員 村松武氏により指導を受けた。
12. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館（飯田市上川路1004-1 TEL0265-26-9009）で保管している。

凡 例

本報告書の記述にあたっては、石室各部の名称について基本的に従来使われているものを用いるが、複数の名称が使われているものもあるため、本報告書では下記の凡例によるものとする。



目 次

卷頭図版	
序	
例 言	
凡 例	
第Ⅰ章 経 過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織	3
1. 調査団	3
2. 事務局	3
第Ⅱ章 遺跡の環境	4
第1節 自然環境	4
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 古墳の立地と周辺の状況	8
第1節 立 地	8
第2節 周辺の古墳	8
第3節 調査前の状況	10
1. 「下伊那史」第二巻の記述について	10
2. 調査前の状況	11
第Ⅳ章 墳丘および埋葬施設	14
第1節 墳丘・周溝	14
1. 検出状況	14
2. 墳丘盛土・周溝	15
3. その他外部施設	16
第2節 埋葬施設——横穴式石室	21
1. 残存状況	21
2. 規模・形態	21
3. 形態的特徴	22
4. 構築方法	27
5. 石室石材	29
第3節 墳丘盛土および石室構築工程	31
1. 墳丘東西トレンチの状況	31
2. 羨道部の状況	33
第4節 古墳規模・形態復元	34
第V章 出土遺物	35
第1節 石室内遺物出土状況	35
1. 検出状況	35
2. 出土状況	35
第2節 出土遺物	41
1. 武器・馬具	41
2. 装身具	48
3. 土師器・須恵器	49
4. その他	52
第3節 墳丘および周辺出土遺物	53
第4節 古墳の築造時期と追葬	56
第VI章 ま と め	58
第1節 横穴式石室について	58
第2節 上溝11号古墳の位置付け	60
引用参考文献	61
付編 上溝11号古墳出土装飾大刀の柄頭に施された象嵌について	62
報告書抄録	103

挿図目次

挿図1 上溝11号古墳位置図	5	挿図4 上溝11号古墳全体図	13
挿図2 上溝11号古墳とその周辺	9	挿図5 南東側調査区	
挿図3 基準メッシュ図区画調査位置	12	北西側調査区小ピット	14

挿図6	試掘トレンチ・ 南東側調査区土層断面図	17
挿図7	北西侧調査区・墳丘東西トレンチ 土層断面図	19
挿図8	横穴式石室平面図・断面図	23
挿図9	閉塞石断面図・側面図・平面図	26
挿図10	横穴式石室の特徴	28
挿図11	墳丘および石室構築工程	32
挿図12	墳丘復元図	34
挿図13	遺物出土状況	37
挿図14	出土遺物配置図	39
挿図15	玄室出土装飾付大刀	43

挿図16	玄室・羨道部出土直刀・刀装具・鉄鎌・ 刀子ほか金属製品	45
挿図17	玄室出土鉗具・轡	46
挿図18	玄室出土留金具	47
挿図19	玄室出土金環・銀環・玉類	48
挿図20	玄室出土土師器・須恵器	50
挿図21	玄室・羨道部出土土師器・須恵器	51
挿図22	調査区および石室外出土遺物	54
挿図23	墳丘出土石器	55
挿図24	市内の横穴式石室	59
挿図25	銀象嵌柄頭の成分分析	63

写真図版目次

図版1	調査前・調査開始	67
図版2	横穴式石室検出状況・掘り下げ	68
図版3	横穴式石室全景	69
図版4	遺物出土状況	70
図版5	遺物出土状況	71
図版6	遺物出土状況	72
図版7	遺物出土・検出状況	73
図版8	玄室西側壁	74
図版9	玄室・羨道部東側壁	75
図版10	奥壁	76
図版11	西側壁	77
図版12	東側壁	78
図版13	横穴式石室全景・羨道部閉塞石	79
図版14	羨道部閉塞石	80
図版15	横穴式石室全景・閉塞石	81
図版16	閉塞石最下段	82
図版17	横穴式石室全景 (閉塞石取りはずし後)	83
図版18	横穴式石室全景(閉塞石・玄室底部石敷 取りはずし後)	84
図版19	閉塞石取りはずし後・玄室底部石敷取り はずし後・西側壁前端部	85

図版20	西側壁玄室・羨道部	86
図版21	東側壁玄室・羨道部	87
図版22	玄室中央D-D'土層	88
図版23	上溝11号古墳全景	89
図版24	墳丘東西トレンチ・西側壁外側攪乱・ 西側壁裏込め	90
図版25	墳丘東西トレンチ・東側壁裏込め	91
図版26	北東側調査区・試掘トレンチ	92
図版27	周溝	93
図版28	周溝表土剥ぎ・ 測量調査風景・写真撮影	94
図版29	石室実測風景・現地見学会	95
図版30	玄室西側壁際出土 装飾付大刀(出土時)	96
図版31	玄室西側壁際出土 装飾付大刀(処理後)	97
図版32	玄室出土直刀・轡・ 鉄鎌・鉗具・留金具	98
図版33	玄室出土土師器・須恵器	99
図版34	玄室・羨道部出土土師器・須恵器	100
図版35	羨道部出土須恵器・石室外・ 各調査区出土土器類	101

第Ⅰ章 経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成14年4月26日付で、飯田市松尾上溝3329・3327-2における農地造成および宅地開発に伴う、「土木工事等のための埋蔵文化財発掘調査の届出」が提出された。当該工事計画地は埋蔵文化財包蔵地上溝羽場遺跡に該当し、そのうち上溝3329は、上溝1号古墳として周知されている。本古墳は、1998年刊の「飯田の遺跡」では消滅として記載されているが、周辺より数十cm高く墳丘が残っていた。事業の性格から工法変更による保存は困難であったため、記録保存のための発掘調査を行なうこととなった。

第2節 調査の経過

以上の経過を経て、平成14年5月13日に現地形の測量および基準点測量を実施し、発掘調査を開始した。道路部分の調査は、工区が狭いことからトレンチ状の調査となり、墳丘を中心に北西側調査区と南東側調査区を設定した。墳丘部分については、削平が進んでいたが、横穴式石室の底部が残っており、石室内部も比較的良好な状態で確認できた。石室内部については主軸に沿った1m四方のグリットを設け調査を進行した。また石室主軸と直交する方向に墳丘を断ち割るトレンチ（墳丘東西トレンチ）を設定した。

同年6月15日、現地見学会を開催した。200名近くが訪れ、関心の高さが窺えた。翌7月24日に調査は終了し、撤収した。

平成15年度は図面・出土遺物の整理・図化等を行い、報告書刊行を行なった。また石室覆土を築い、微細遺物の回収に努めた。現地では確認出来なかったが、ガラス玉が出土した。

現場作業の詳細は以下の調査日誌のとおりである。なお、遺構等の呼称は調査時点でのものである。

作業日誌

平成14年5月

13日(月) 地形測量、表土剥ぎ

14日(火) 表土剥ぎ、墳丘表土除去

15日(水) テント設営、トレンチ1・2掘削
墳丘表土除去

16日(木) トレンチ1・2掘削開始

17日(金) 雨天中止

20日(月) トレンチ1・2掘削

21日(火) トレンチ1・2掘削、墳丘表土除去、石

室確認

22日(水) トレンチ1周溝確認・掘削、石室検出

23日(木) トレンチ1疊出土状況撮影、トレンチ2
掘削、石室検出状況撮影、遺物No1留金
具出土

24日(金) トレンチ1疊出土状況実測、トレンチ2
周溝掘削、羨道部検出・石室検出状況実
測

27日(月) トレンチ1セクション実測、トレンチ2

周溝掘削、羨道部検出、石室検出状況実測	実測
28日(木) レンチ2撮影・平面・セクション実測、玄室掘削、羨道部検出	26日(木) 雨天中止、竜丘小学校6年1組生徒見学
29日(金) レンチ1実測、レンチ2セクション実測、玄室掘削、遺物出土状況撮影	27日(木) 玄室側壁・閉塞石実測
30日(土) レンチ1掘削、玄室掘削、遺物出土状況撮影・実測、閉塞石実測	28日(金) 玄室側壁・閉塞石実測、石室覆土篠い 平成14年7月
31日(日) レンチ1掘削、玄室掘削、閉塞石撮影・実測、装飾付大刀出土、松尾小学校6年生見学	1日(月) 雨天中止
平成14年6月	2日(火) 精査・全景撮影、石室覆土篠い
3日(月) レンチ1,2撮影・実測、玄室掘削、奥壁付近で遺物がまとまって出土	3日(木) 玄室側壁撮影、閉塞石縦に半裁、玄室内 攪乱掘削、飯田市美術博物館学芸員 村 松武氏による石室石材現地指導
4日(火) 玄室掘削、底部確認、羨道部側は攪乱を受けている、羨道部実測・閉塞石除去	4日(金) 玄室エレベーション実測・閉塞石セクション実測・除去、攪乱部撮影
5日(水) 玄室底面および遺物の検出・撮影・実測	5日(土) 攪乱部掘削、羨道部側壁実測・閉塞石縦 断面実測・除去、石室覆土篠い
6日(木) 玄室底面および遺物の検出・精査、玄室セクション実測・閉塞石撮影	8日(月) レンチ1延長・掘削、レンチ3・4 掘削、側壁の裏込めを確認、玄室・玄門 部見通し実測、閉塞石縦断面撮影・実測、 羨道部底部には石敷が確認できず
7日(金) 遺物出土状況および全景撮影、閉塞石実測・除去	9日(火) 閉塞石縦断面実測、遺物出土状況撮影・ 実測
10日(月) 遺物出土状況実測・取り上げ、石室覆土篠い	10日(水) 雨天中止
11日(火) 遺物出土状況実測・取り上げ、玄室精査	11日(木) 羨道部側壁実測・閉塞石除去、墳丘横断 面(レンチ3・4)実測、石室覆土篠い
12日(水) 遺物出土状況実測・取り上げ、玄室精査、 閉塞石実測・除去	12日(金) 羨道部側壁実測、エレベーション実測、 閉塞石実測、石室全景撮影
13日(木) 玄室側壁実測・精査、閉塞石実測・除去 新聞社数社取材	15日(月) 雨天中止
14日(金) 玄室側壁実測、閉塞石撮影・除去	16日(土) 羨道部側壁実測・閉塞石完掘、墳丘横断 面(レンチ3・4)撮影
15日(土) 現地見学会開催	17日(日) 羨道部精査、午後雨天中止
17日(月) 石室実測用基準点設置、墳丘断ち割るト レンチ3・4掘削	18日(火) 閉塞石除去後石室全景撮影、石室覆土篠 い
18日(火) 雨天中止	19日(水) 雨天中止
19日(水) 玄室底部実測、遺物取り上げ	22日(土) 玄室底部石敷除去・縦断面撮影・実測、 羨道部縦断面撮影・実測
20日(木) 玄室底部実測、雨天のため午後中止	23日(日) 石室側壁・同横断面実測、玄室東側壁を 外しレンチ4と玄室セクションをつな げ、石室の構造を観察
21日(金) 玄室底部・閉塞石実測、レンチ3・4 掘削	24日(月) 墳丘横断面(レンチ3・4)実測・撮 影、機材搬出、作業終了
24日(月) 玄室底部・玄室側壁・閉塞石・墳丘横断 面(レンチ3)実測、石室覆土篠い	
25日(火) 羨道部側壁・墳丘横断面(レンチ3)	

第3節 調査組織

1. 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会

教育長 富田 栄啓

総括 小林 正春

調査担当者 濵谷恵美子 羽生 俊郎

調査員 馬場 保之 吉川 金利 伊藤 尚志 (～H15年9月)

坂井 勇雄 (～H14年度) 佐々木嘉和

現場作業員 太田 沢男 北原 裕 小平不二子 濱古 郁保 田中 薫

田中 博人 中村地香子 中山 敏子 橋本 宣子 古林登志子

整理作業員 金井 照子 木下 早苗 小池千津子 小平まなみ 佐藤千代子

竹本 常子 橋 千賀子 中平けい子 橋本 宣子 松本 恵子

宮内真理子 森藤美知子 吉川 悅子

2. 事務局

飯田市教育委員会

教育次長 久保田裕久 (～H14年度) 尾曾 幹男 (H15年度～)

生涯学習課長 中島 修 (～H14年度) 小林 正春 (H15年度～)

文化財保護係長 小林 正春 (～H14年度) 吉川 豊 (H15年度～)

文化財保護係 馬場 保之 濵谷恵美子 吉川 金利 伊藤 尚志 (～H15年9月)

坂井 勇雄 (～H14年度) 羽生 俊郎 佐々木行博

学校教育課長 伊藤 昌治

総務係長 高田 清

総務係 宮田 和久

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境（挿図1）

飯田市は長野県の南部を並走する木曽山脈（中央アルプス）と、赤石山脈（南アルプス）の前山である伊那山脈に挟まれた伊那谷の南端、飯田盆地に位置する。伊那谷の中央には天竜川が南流し、国内でも有数の河岸段丘を形成している。伊那谷は南北に約100kmと長く、北は諏訪地方・塩尻地方に接する。また南は天竜川伝いに遠州地方に、西は木曽山脈を隔てて三河地方にそれぞれ通じており、飯田市は長野県の南の玄関口といえる場所にある。

伊那谷の基盤地質は領家帯に属す花崗岩・片麻岩である。一方伊那谷の東、伊那山脈と赤石山脈の間には中央構造線が走っており、三波帯・戸台構造帯・秩父帯・四万十帯が赤石山脈を構成している。この秩父帯・四万十帯から産する硬砂岩・緑色岩・チャート等の堆積岩は、三峰川・小渋川を伝って天竜川河床に分布し、旧石器時代から古墳時代にいたるまで石器の材料として長く利用されている。

伊那谷の形成は、約250万年前に天竜川が流れ始めたことから始まる。伊那谷特有の段丘地形は赤石・木曽両山脈が隆起するに伴い、沖積地との間に形成された逆断層によるものであり、一般的な侵食差により形成された河岸段丘とは異なる。下伊那の地質図（1976）によると、高位面・高位段丘・古期扇状地・中位段丘・中期扇状地・低位段丘I・新期扇状地・低位段丘IIの5つに大きく編年されている。

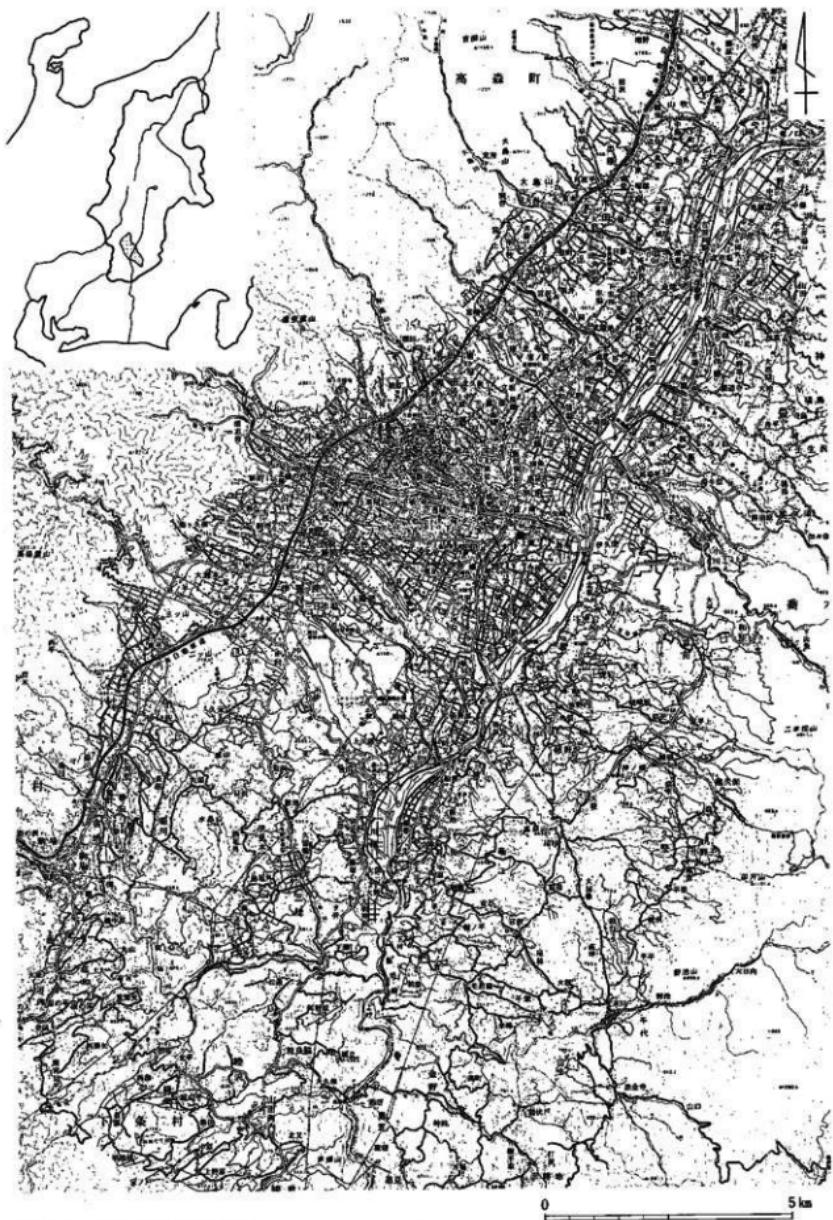
上溝羽場遺跡は飯田市松尾地区上溝に所在する。松尾地区は飯田市街地の南にあり、東は天竜川を挟み下久堅地区に、南は毛賀沢を挟み竜丘地区に、西は中位段丘から鼎・伊賀良地区に、北は飯田松川を挟み上郷地区にそれぞれ接している。

天竜川は松尾地区では氾濫原を形成しているが、竜丘地区駄科からは再び狭窄している。当地方の段丘地形は、高燥した「上段（うわだん）」と湿地化した「下段（しただん）」とに俗に分けられている。松尾地区では矢高原から松尾城址にかけてが上段と呼ばれ、それ以下は下段と呼ばれる。各段丘崖は南北方向に走る。しかし、飯田松川沿いで自然堤防状に発達した段丘は、天竜川との合流点付近まで延びており、松尾地区全体として東側に湾曲する。松尾地区上溝は、このように下段に発達した自然堤防状の低位段丘II b1（中村面）に立地する。調査地点の標高は417m前後である。松川現河床との比高差は約10m、距離にして約350mの位置にあり、天竜川現河床との比高差は約25m、距離は約1.2kmを測る。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超え、2月の平均気温は1.4℃、8月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量からみれば年間約1600mm、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬に少ない太平洋岸式気候に属するといえる。

松尾地区は市内でも低位に位置し、また西北側に段丘崖を背負うことから、市内でも温暖な気候であり、年間平均気温で飯田市中心部より1℃高い。「松尾は雪が積もらない」とまで言われている。

こうした地理的・気候的条件により、飯田下伊那地方には暖地性から亜高山性まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帶性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なっている。



插図1 上海11号古墳位置図

第2節 歴史的環境

現在飯田市内で最初の人類の活動痕跡は、山本地区の石子原遺跡ならびに、現在調査中である竹佐中原遺跡である。日本列島内で一般的な後期旧石器の特徴を備えておらず、それを巡る可能性がある。松尾地区においては猿小場遺跡が最古であり、ナイフ形石器が出土している。しかし、わずか2点が遺構外から出土したに過ぎない。飯田下伊那地方全般的に当該期の人類の痕跡は希薄である。

縄文時代草創期になると上溝天神塚古墳墳丘より有舌尖頭器が出土しており、近辺に当該期の遺跡の存在が予想される。早期には清水遺跡・寺所遺跡・妙前遺跡で押型文土器が出土しており、比較的早くから下段も生活の舞台として利用されていたようである。前期には八幡原遺跡で住居址・土坑が確認されている。中期になると妙前遺跡が特筆される。当地方の中期内の大規模集落は洪積台地上に存在するところられていたが、下段の沖積地にも積極的に展開していることが明らかになり、さらに飯田下伊那地方でも屈指の中期集落であることが確認された。続く縄文時代後・晚期にかけての資料はほとんどない。

飯田下伊那地方では、その複雑な段丘地形により大規模な水稻耕作は不向きであったとみえ、弥生時代に入ってしまくは遺跡数も少ない。遺跡数が増加し、大規模集落が形成されるのは、市内他地域と同様弥生時代後期になってからである。妙前遺跡・田圃遺跡・清水遺跡・松尾城遺跡等の下段に加え、猿小場遺跡といった高燥地にも集落が進出してくるのが後期である。こうした地域の状況の中にあって、寺所遺跡は、天竜川氾濫原近くの沖積地に立地し、また中期の土器が多く出土しており注目される。この土器は「寺所式」と呼ばれ、当地方の弥生時代編年の一指標となっている。

古墳時代前期の集落址は類例が少ないが、松尾城遺跡・清水遺跡等において確認されている。後期の集落址は、妙前遺跡・久井遺跡・上溝遺跡・田圃遺跡等が挙げられる。特に妙前遺跡は、発掘調査の結果から同時期に120軒程度の大集落があったと推察されており、上溝11号古墳の一段下の段丘、約120m東側に位置することから、被葬者の居住区と墓域との関連が予想される。上溝天神塚古墳の墳丘下からは5世紀代の住居址が確認されており興味深い。

松尾地区は竜丘地区・座光寺地区と並んで古墳の数が多いことで知られ、煙滅したものも含めると現在70基が確認されている。その中でも最古のものは、長野県史跡に指定されている代田山狐塚古墳である。市内唯一の前方後方墳であり、4世紀後半のものである。前時代から継続した勢力の下に築造されたと考えられている。代田山狐塚古墳以降は約100年間の古墳空白期が存在するが、八幡原遺跡では、方形周溝墓・円形周溝墓が暫らく築かれていた。中期になると、数多くの古墳が築造されるようになる。長野県宝指定眉庇付冑を出土した妙前大塚古墳に代表される妙前古墳群、馬の副葬を伴う茶柄山古墳群等が挙げられる。後期では、今次調査した上溝11号古墳を含む上溝古墳群や水佐代獅子塚古墳・代田獅子塚古墳等多くの古墳が築造されている。後期の前方後円墳が多いのも松尾地区の特徴といえる。

飯田下伊那地方における5世紀以降の古墳文化の隆盛については、馬匹生産により大和王権を直接的に支えていたことが要因であることが、茶柄山古墳群をはじめとする豊富な馬や馬具の出土事例より裏付けられている。5世紀代の馬の出土例は松尾・座光寺および上郷地区で多く報告されており、直接馬匹生産に関わった集団である。八幡原遺跡では直径58mにおよぶ時期不明の溝址が確認されているが、馬飼育に関わる施設であるとする見方がある。伊那谷特有の切り立った段丘地形が、馬生産に適した地

形であったとみられている。一方、松尾・座光寺以上に古墳の多い竜丘地区では、今のところ、5世紀代の古墳から馬は出土していない。そのため、直接生産に携わる集団を統括する立場にあったと理解されている。換言すれば、松尾地区古墳勢力は、竜丘地区古墳勢力に従的であったともいえる。そして6世紀以降は、竜丘地区以外でもほとんど馬の殉葬例がなくなるため、飯田下伊那地方全域が間接的・統括的な馬匹生産の形態に変換したようである。飯田市は、地理的に東国の大門口ともいえる。6世紀以降、飯田下伊那地方は馬供給基地としての役割を担い、古墳文化の隆盛を得たといえる。また上郷地区溝口の塚古墳の調査により、当地の支配層に渡来系の色彩が強く認められることもわかってきた。

奈良時代には、東山道が市内を通過していた。座光寺地区恒川遺跡群に伊那郡衙が存在したことは確実であり、久井遺跡の大型掘立柱建物址は詳細な時期は不明であるが、官衙に関連する可能性が高い。毛賀御射山遺跡からは、掘立柱建物址と共に平安前期の布目瓦や瓦塔片が出土しており、平安期に寺院が存在したと目される。竜丘地区では安宅遺跡・前の原遺跡において、一般集落よりも官衙的色彩が強い掘立柱建物址が確認されており、上川路廃寺・前林廃寺が少なくとも存在したとされる。また松尾地区以上に古墳の多い地区もある。これらのことから、阿智村神坂峠を越した東山道は何処かを下り、竜丘地区・松尾地区・座光寺地区を通過したものとみられる。また各地に建立された寺院は、古墳に替わり権力の象徴とされた。

この時代の集落は田園遺跡・妙前遺跡で確認されている。つづく平安時代の集落は下段の田園遺跡・妙前遺跡等に加え、上段の猿小場遺跡・八幡原遺跡等でも規模の大きい集落が展開てくる。

中世鎌倉時代の詳細な様相は不明であるが、現在の松尾支所付近は「城」と呼ばれており、この時代に居館があったと考えられている。この時代の具体的な資料としては、重要文化財指定鳩ヶ嶺八幡宮善田別尊像に建治3年（1277年）の銘が確認されている。

所謂小笠原流の武道や礼法を確立したのは、信濃守護職であり伊賀良庄を所有していた小笠原貞宗であるが、一時期松尾城にも入っていた。南北朝時代のことである。この頃に松尾城址は築城されたとみられるが、鎌倉時代であるかもしれない。上の城は松尾城の出城であり、また現在の水神橋のたもとに天竜川の渡渉点を守る砦があったとされる。松尾は小笠原氏の本拠地として長らく栄え、飯田下伊那地方の中心都市であった。松尾城が廃城となったのは天正18年（1590年）、豊臣秀吉により、小笠原信頼が武蔵の本庄へ一万石で転封となったからである。ここで久しく飯田下伊那地方の中心であった松尾は衰え、飯田にその座を譲ることになった。

現在飯田には主要な道路として、国道151号が松尾を通過しているが、天竜川に沿い遠州地方に続く遠州街道を、武田氏が遠州侵攻に伴い整備したものがもととなっている。また、飯田から遠山を経てやはり遠州に続く秋葉街道（国道256・152号線）や、三河地方に通ずる三州街道（国道153号線）もやはり武田氏の時代に改修されたものがもととなっている。遠州街道は中馬道として江戸時代に発達し、秋葉街道との分岐点が鳩ヶ嶺八幡宮の前には道標が立っている。

このように飯田下伊那地方は原始より東西の文化の交点として、古代には東国への玄関口として、中世以降は遠州への道として栄えた土地柄であり、その中でも松尾地区は、古代から中世にいたるまで飯田下伊那地方の中心地の一つであった。そして現在も、その恵まれた地理的条件から人口が大幅に増え続けている地域であり、市内でも最も勢いがある地区といってよい。

第Ⅲ章 古墳の立地と周辺の状況

既に第Ⅱ章にて松尾地区の環境について述べたが、本章にてより詳細に述べることとする。

第1節 立 地

上溝は、松尾地区の北部、幾重にも重なる飯田松川の自然堤防状の河岸段丘上に位置する。この段丘は、大きくみれば3面、細かくみれば8面数えることができる。

最上段は八幡原から松尾城址にかけてであり、標高約480mである。一段下がって猿小場、さらに下がって北の原の台地がある。俗に「上段」と呼ばれ、ローム層が厚く堆積し乾いている。「松尾村誌」(1982)によれば、北の原の東端は上の城・茶柄山と呼ばれる。かつては墓地や山林であったが、病院や商業地、宅地と近年発展している。この台地は飯田松川に並行して延びており、「下段」との比高差は高いところで約60mである。

松尾地区の下段では、南部では毛賀御射山が、中・北部では上溝・八幡町・代田が最上位である。標高は420m前後、国道151号(遠州街道)およびJR八幡駅があり、松尾地区的中心地である。

松尾中心地の下位には、水城・城と呼ばれる段丘が控え、松尾支所等が所在する。北部飯田松川沿岸では、妙前が上溝の下に位置する。標高は405m前後である。さらに下位には、比高差2~5mの崖を挟み寺所の段丘が、さらに1~2m下位には新井の段丘、と繰り返しており、飯田松川に沿って天竜川付近まで延びている。これらの段丘面は松尾地区でも最低位の段丘であり、湿地と微高地が継状に繰り返される冲積地である。天竜川現河床との比高差は2~3mを測り、氾濫原と共に主に水田として利用されている。

上溝地籍の台地は、姫塚古墳付近を境に、比高差2~4mの崖で東西に分けることができる。「松尾村誌」によれば、西を上溝姫塚平、東を羽場塚平という。上溝11号古墳は、一段低い羽場塚平に位置する。南側に向かいやすや傾斜した小台地であり、拳大亜角礫を含むローム層を薄く堆積する。松尾地区、上郷地区をはじめ、天竜川東岸を眺望でき、眼下に広がる妙前古墳群・妙前遺跡とは10m強の比高差がある。

第2節 周辺の古墳(挿図2)

代田山狐塚古墳は前期に位置付けられる、全長約42mの前方後方墳である。平成5年に測量調査を実施した。これまでのところ市内最古の古墳と考えられる。

茶柄山古墳群は北の原の東端に位置する。前方後円墳である茶柄山3号古墳・御射山獅子塚古墳を中心、8基の円墳から構成される。一般国道153号飯田バイパス建設に先立ち発掘調査されており、9号古墳の周溝からは6基の馬の墓が、周辺にも2基の馬の墓が確認されている。2号古墳周溝外からも



- A. 上溝11号古墳 1. 姫塚古墳 2. 上溝天神塚古墳 3. おかん塚古墳 4. 羽場賀子塚古墳 5. 妙前大塚古墳(妙前古墳群)
 6. 茶柄山3号古墳(茶柄山古墳群) 7. 御射山獅子塚古墳 8. 水佐代獅子塚古墳 9. 紗見山古墳(埋藏)
 10. 八幡町古墳(埋藏) 11. 八幡山古墳 12. 代田山孤塚古墳 13. 代田獅子塚古墳 14. 鮎沼天神塚古墳
 15. 清口の塚古墳(埋藏) 16. 宮の前垣外古墳
 17. 村沢遺跡 18. 松尾北の原遺跡 19. 上の城跡 20. 八幡原遺跡 21. 地蔵面遺跡 22. 上溝遺跡 23. 八幡町遺跡
 24. 久井遺跡 25. 水堀遺跡 26. 紗前遺跡 27. 寺所遺跡 28. 新井遺跡 29. 松尾城遺跡 30. 明道跡 31. 代田遺跡
 32. がにが原遺跡 33. 田園遺跡 34. 清水遺跡

插図2 上溝11号古墳とその周辺

馬の墓が2基確認され、このうち1基より三環鉢が出土している。本古墳群は中期のものが多く、御射山獅子塚古墳は横穴式石室を有したと伝えられているが、今後本古墳の時期については修正される可能性もある。茶柄山古墳群の西方およそ500mに位置する物見塚古墳の埋葬施設は、粘土部内に割竹形木棺を納めた円墳である。古墳築造の年代とは異なる可能性があるものの、周溝から馬の歯および轡が出士している。ただし、現在の行政区画では鼎地区になる。

茶柄山古墳群の直ぐ下には上溝古墳群が存在する。羽場獅子塚古墳・姫塚古墳・上溝天神塚古墳・おかん塚古墳の4基の前方後円墳と11基の円墳から構成される。羽場獅子塚古墳はかつて前方部幅13.6m、後円部径21mを測ったが、現在前方部は破壊されているが、残存状況から前方後方墳の可能性も多い。姫塚古墳は全長約40mを測り、片袖式の横穴式石室を有する。現在飯田下伊那地方で片袖式が確認されているのは、姫塚古墳のみである。石室内は彩朱されており、七輪鏡が出土している。上溝天神塚古墳は全長約47mであり、二重周溝を特徴とする。無袖式の横穴式石室は、上溝11号古墳の天井石を用いて修理されたらしい（これについては後述する）。6世紀前半に位置付けられている。おかん塚古墳はもともと全長50m以上あったとされるが、西側墳丘は道路建設時に削平され、その際小石室が調査されている。現存する東側墳丘内に残る両袖式の横穴式石室は、長軸10.3m、幅は最大3.5mと市内有数である。從前、残存する東側墳丘が後円部と判断されてきたが、同様に2つの石室をもつ竜丘馬背塚古墳との比較から、東側が前方部となることも推測される。本古墳は明治期に発掘され、刀・馬具・須恵器等が出土している。6世紀後半に位置付けられる。

妙前古墳群は長野県宝である眉庇付冑を出土した、妙前大塚古墳を筆頭とする15基の円墳から成る。その内半数以上は現存し、飯田松川に沿って並んでいる様は見事である。妙前大塚古墳は直径30m以上、礫と粘土混じりの柳を持つ。5世紀中頃に築造されたとみられる。その他の円墳も多くは中期に位置付けられるが、（横穴式）石室を有したとされる古墳が3基存在する。

このほか、前方後円墳として、水佐代獅子塚古墳は全長約54mを測る古墳であり、横穴式石室を有するとされる。代田獅子塚古墳は全長約64mで、横穴式石室を有するとされているが、2墳とも時期的に遡る可能性があり、将来築造時期については修正される可能性が高い。

古墳の多い飯田市であるが、石室自体の調査事例は少ない。本古墳と同時期のものでは、座光寺地区ナギジリ1号古墳が挙げられる。推定で直径15mと推察される円墳であり、全長8.8mの両袖式の横穴式石室が調査されている。玄室は側壁で長さ6.6m、最大幅2m、奥壁部幅1.8m、中央部天井石残存高2.35mであり、羨道部は長さ2.4m、最小幅0.9m、玄門部幅1.9mを測る。出土遺物には乳文鏡・金環・銀環・玉類・轡ほか馬具・鉄鐵・土師器・須恵器がある。6世紀後半に築造され、8世紀前半まで3時期にわたり追葬が行われている。その被葬者の地位は、馬管理において中間的であったと推察される。

第3節 調査前の状況

1. 「下伊那史」第二巻の記述について

周辺は田畠であるが、上溝11号古墳があるとされる場所はやや周囲よりも小高くなっている。この古墳については、「下伊那史」第二巻に記載がある。以下、本古墳に関する部分を引用する。

『2 上溝古墳群

東部低地の西北に位する上溝の平坦なる低台地上には凡そ方五〇〇米の地域内におかん塚・天神塚・姫塚等の前方後円墳を中心として、それをとりまく十余基の円墳あり、密集せる古墳群を形成している。

(略)

上 溝一号

次の三墳は第六号～第十号諸墳集群地の東南につづいた一段低い台地上にならんでいる。

第一号墳は上溝第一〇号の東南三〇米をへだてた所にある、周囲はことごとく水田で塚跡だけが小高い畠（八・三米に九・五米）となって残る。その東南隅に方四米ばかりに塚石を積み重ねた上に「大山祇神」の小祠がある。ここにはもと杉の大木があったが、今は切株だけとなった。一部の石は畠の周囲にならべて土止めとしてある。大石一つ（天井であろう。）は天神塚に運んで石室入口の修補に用い現存する。』

なお、「次の三墳」とは12・13・14号古墳をさす。また、天神塚に運んだ大石については、天神塚（上溝第五号）に『(略)なんでも大戦争のはじまる直前のことである、氏子の木下富太郎氏が主任となつて、約一軒東方上溝十二号の塚跡にあった天井石をここへ運んで来て、アーチを撤去したあとに石を組んで、この石をのせ現在の如く入口を整えた。長さ二米余、厚さ一米の巨石であったから、その作業は非常に困難で、鋼索と滑車を用いて工事を完成した。』とある。上溝12号古墳は現在その存在をまったく認められないが、上溝11号古墳の周囲には天井石であったとみられる比較的大型の石が残っており、ここで上溝12号となっているのは、11号の誤りともみられる。

ちなみに昭和57年に刊行された「松尾村誌」の記述は以下のとおりであり、「下伊那史」の記述と大差ない。

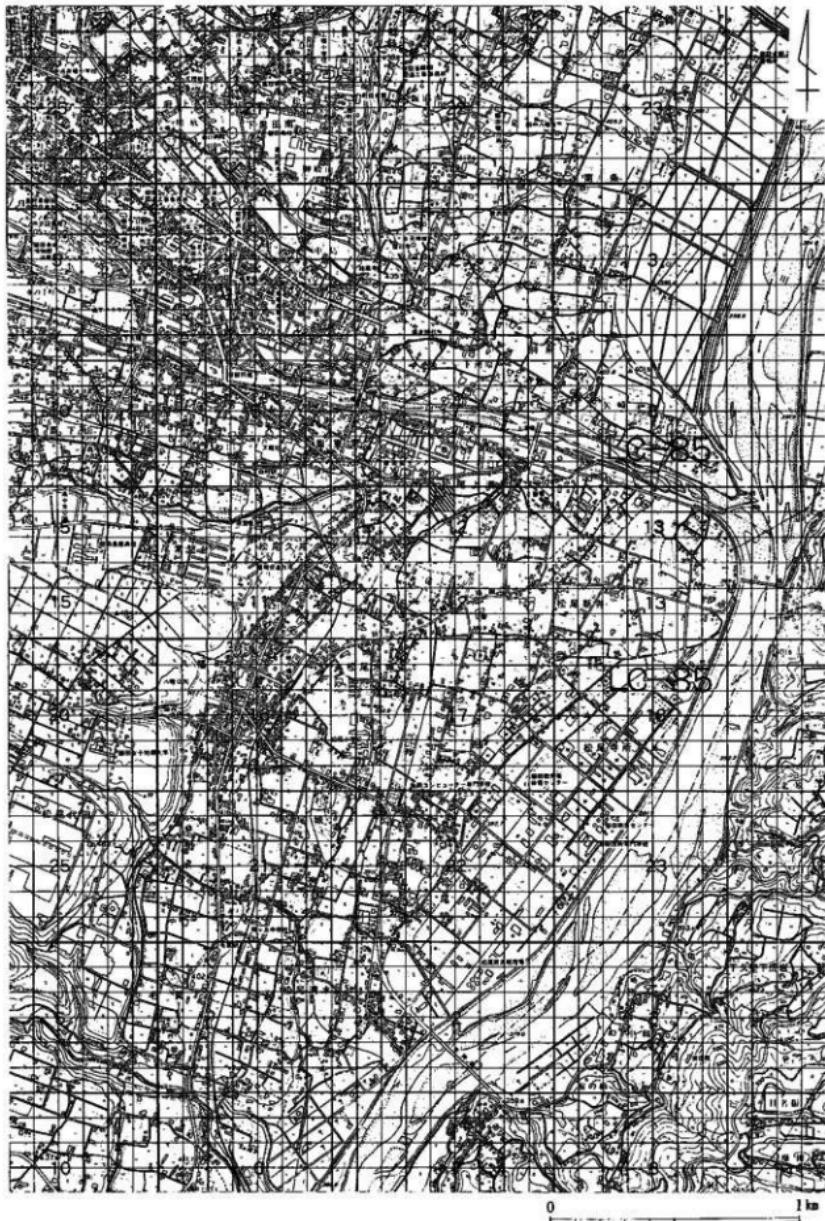
『上溝台地から下の低地に向かう段丘崖に近い所にある。水田の中に小高い畠があり、その一隅に方四mほどに石を積み重ねてあり、そこに大山祇神の小祠がある。石室の石を用いたものである。』

以上のように、本古墳は出土遺物については不明であるものの、石室が存在する可能性が高い。上溝古墳群は4基の前方後円墳を中心とする古墳群であり、うち3基の前方後円墳が横穴式石室を有する。羽場獅子塚古墳が時期的に遡る可能性があるものの、全体としては、6世紀代を中心とする古墳群として捉えられている。しかし、発掘調査がなされているのは、おかん塚古墳と上溝天神塚古墳の一部についてであり、古墳群全体としての築造時期・変遷は明確ではない。

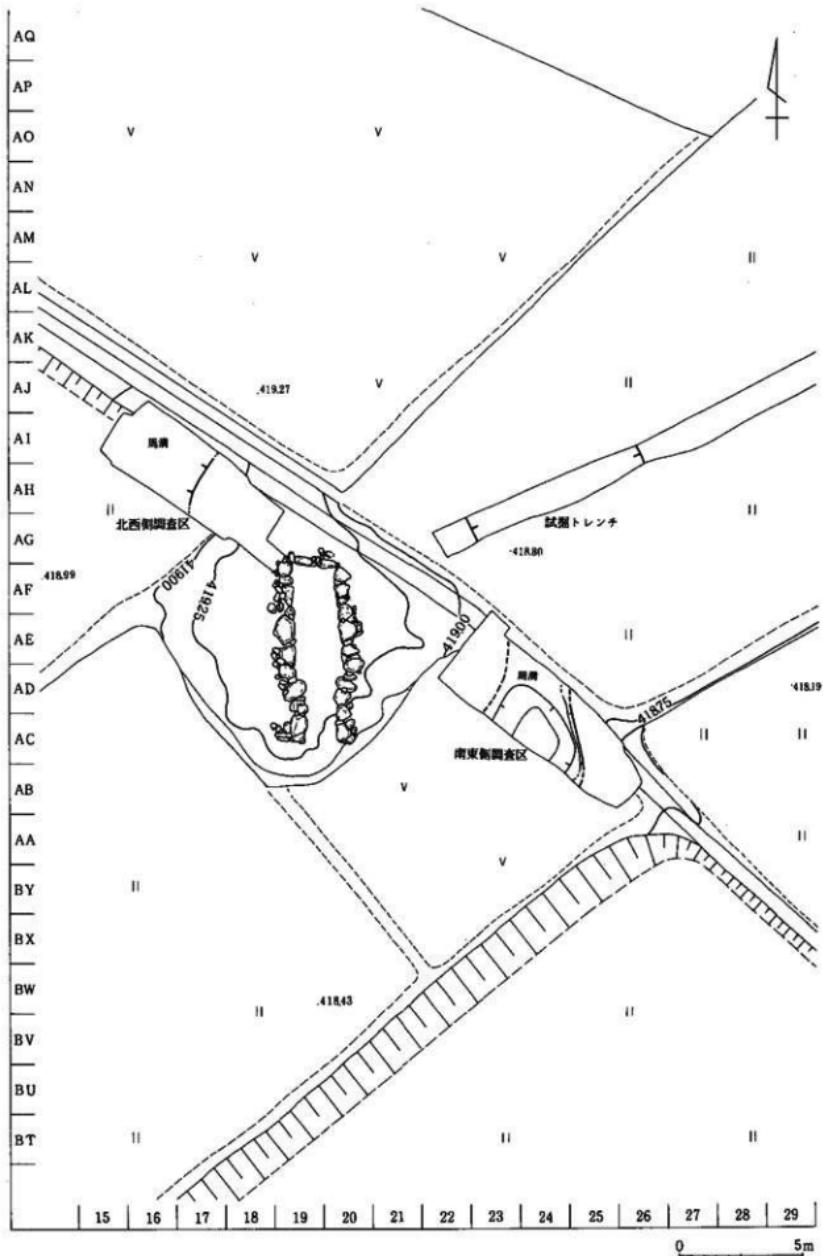
2. 調査前の状況（図版1）

「下伊那史」第二巻刊行以降60年近くの歳月が経ったわけであるが、古墳自体の調査前の状況は全く変化がないといえる。周囲を水田・桑園等に囲まれ、石室に用いていたであろう巨石で墳丘を取囲んでおり、祠が南側隅にあった。調査前の地目は山林として登録されていた。

墳丘については、現状で確認できる残存部分は約11m四方で、周辺からの残存高は1m程度である。



挿図3 基準メッシュ図区画調査位置



挿図4 上溝11号古墳全体図

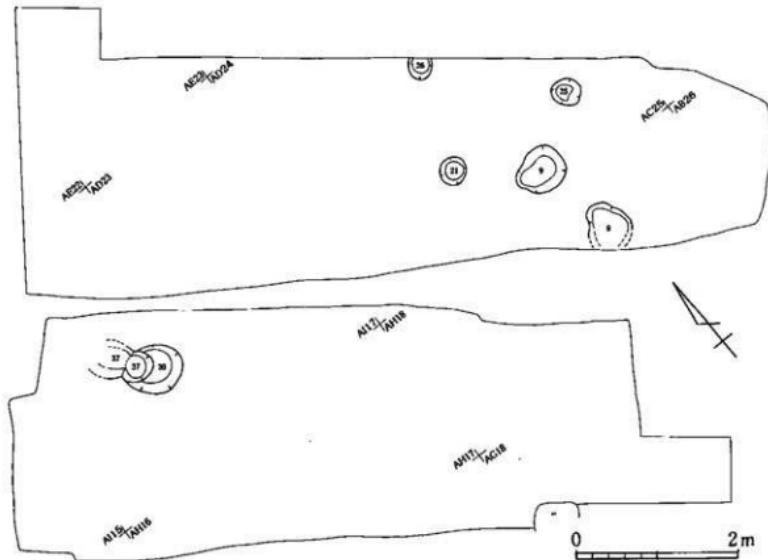
第Ⅳ章 墳丘および埋葬施設

第Ⅲ章のとおり、現状で墳丘は小山程度であり、古墳全体を確認することはできなかった。しかし、横穴式石室は下半分の側壁が残存しており、石室内の遺物は追葬時の移動等があるものの、古墳として利用された最終的な姿を比較的良好に残している。さらに部分的ではあるが、盛土と石室構築の状況を把握することができた。

第1節 墳丘・周溝

1. 検出状況（挿図4）

本古墳は、墳丘盛土外表については葺石も含めて、すべて削平されているとみられる。確認できる盛土は、横穴式石室の周囲が最も残りが良く、さらに北西側調査区で部分的に確認した。南東側調査区および試掘トレンチでは耕作による削平が地山まで及んでおり、墳丘部分を把握できなかった。こうした状況ではあるが、断面観察から墳丘は地山ないし旧表土上に築造されており、ほぼすべてが盛土によるものと考えられる。この盛土には、いわゆる版築といわれるような精緻な層状の堆積はみられないが、互層をなしている部分もある。



挿図5 南東側調査区（上）・北西側調査区（下）内小ピット

周溝は、古墳の北西側と南東側の各調査区で部分的に把握した。また、試掘トレンチ内で墳丘東側の周溝とみられる溝を確認しているが、この周溝は造構検出面での確認のみで、掘り下げは行なっていない。墳丘東西トレンチは周溝まで達しておらず、西側の周溝は調査区外となるため確認できなかった。

なお、北西側・南東側調査区では、周溝とは時期の異なる小ビットを検出した（挿図5）。南東側調査区では小ビットと遺物小片を検出した。小ビットの確認面は周溝覆土（挿図6 C-C' 7・8層）の上面であることから、小ビットは周溝がある程度埋没した段階のものといえる。ビット周辺からは灰釉陶器片等（挿図22-4・5）が出土している。いずれも破片であり、時期決定の要因には乏しいが、平安時代～中世には周溝がある程度埋没していたとみられる。北西側調査区でも上層で小ビットが確認されているが、ここからの遺物の出土はない。

2. 墳丘盛土・周溝

(1) 試掘トレンチ（挿図6 A-A'、図版26）

現地表面から墳丘側で約0.8m、外側で1.1mの深さで造構確認面となり、周溝とみられる溝を確認した。確認面で把握した周溝幅は7.4mである。周溝は地山を掘り込んでいる。厚さ80cm程の耕土（1～3層）下の4・6層は周溝覆土と考えられ、周溝の掘り込み面および墳丘盛土は確認できなかった。

(2) 南東側調査区（挿図6 B-B'・C-C'、図版23・27）

耕作が深くまで及んでおり、盛土のみならず、地山自体も削平されている可能性がある。そのため、古墳築造面が地山なのか旧表土面になるかの判断ができず、周溝の掘り込み面を明確に把握することはできなかった。周溝の範囲は平面的には周溝外縁の一部で確認できたほかは、調査区内の北東側（B-B'）と南西側（C-C'）の2箇所での土層観察により確認した。

B-B'では、周溝覆土および周溝の掘り込みを確認することができなかった。耕土（1～4層）下の5層は旧表土とみられることから、周溝の掘削が旧表土までとすると、この部分での旧表土上面の高さは深いところで418.0mになる。

C-C'では、1～6層が耕土、7～11層が周溝覆土とみられ、周溝は地山を掘り込んでいる。墳丘盛土が削平されているため周溝の墳丘側の掘り込みが明確ではないが、周溝外縁は一部平面的にも把握できる。また断面観察で周溝覆土の堆積状況から周溝の範囲を把握した。地山が削平されている可能性があるので、本来の周溝の規模ではないが、現状で確認できる周溝幅は4.95mであり、最深部までは墳丘側で地山から0.65m、周溝外縁で地山から0.6m程度である。最深部の高さは417.15mになる。

以上のように周溝は平面的にみると、南西側（C-C'）の方が北東側（B-B'）に比べて深く、周溝幅は北東側に向かって狭くなっている。このことから、周溝は調査区内の北東側一画で途切れる、あるいは浅く狭くなるといったことが想定されるが、調査区外にかかるため不明である。

(3) 北西側調査区（挿図7 D-D'、図版23・27）

北西側調査区の盛土（12～19層）は、奥壁寄りの部分で50cm程度残存している。

本調査区では、断面観察では旧表土は残っておらず、地山面に盛土されているとみられる。この盛土と墳丘東西トレンチで確認された盛土とを比較すると、本調査区で確認された盛土は、おそらく最下段

の側壁（奥壁）設置に伴うものと考えられるが、奥壁の裏込めとなる部分を把握することはできなかつた。

周溝については、墳丘側の掘り込みは確認できたが、最終的には地山まで掘り下げ、断面で確認した。周溝の範囲については、平面的な把握と土層断面観察から、周溝覆土とみられる5～11層が堆積する部分を周溝と考えた。周溝は地山を掘り込んでいる。周溝外縁は調査区外となるため確認できず、調査区内で確認できる最大周溝幅は4.5mである。南東側調査区で確認した周溝の最大幅が4.95mであることから、周溝外縁はさらに調査区外に0.5m以上のところということになる。このことから、現時点での最深部が周溝底部の最深部にはほぼあたると考えられる。古墳築造面となる地山からの深さは1m程度で、最深部の高さは417.35mである。

(4) 墳丘東西トレンチ（挿図7 E-E'、巻頭図版3・図版23～25）

ここでは、墳丘築造面は地山あるいは地山の上に堆積する旧表土上である。残存する盛土（3～20層）の高さは、地山または旧表土から60～90cmである。同章 第3節で詳述するが、盛土は最下段とその上の側壁を設置する際に盛られたもので、そのうち、最下段側壁設置に伴うと考えられる盛土（13～18層）は、やや土性の異なる土が互層をなしている状況が確認できる。

また、周溝については本トレンチ内では確認できなかった。

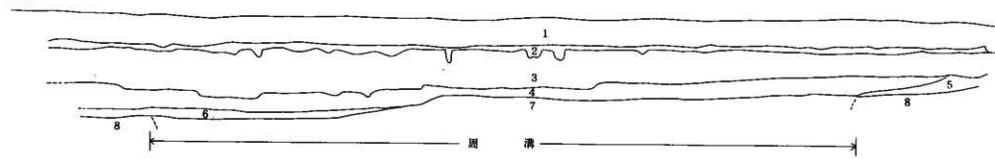
以上のように、周溝内側の掘り込みは各調査区で把握できるが、周溝幅は南東側調査区と覆土の掘り下げを行なっていない試掘トレンチとでは50cm程度差があり、また南東側調査区の状況から周溝の一端が途切れるか、部分的に浅く狭くなる可能性も推定でき、本来の周溝幅が均一ではないことが考えられる。また、周溝底部は南東側の方が北西側より20cm程度低くなっている。

3. その他外部施設（図版27）

本来の墳丘外表がまったく残っていないことから、原位置の葺石は残存していない。南東側調査区の周溝覆土中に人頭大の礫が混入しており、これらは転落した葺石の一部とみられる。しかし、北東側調査区では、葺石とみられる石は確認できず、本来葺石をほとんど伴わないと、削平されてしまったとみられる。

埴輪については、「下伊那史」第二巻の記述にもなく、今回の調査でも出土しなかった。埴輪は葺石よりも破損・転落しやすいものであることから、本来埴輪は伴っていなかったと判断される。

A419.00



A'

1	耕土
2	TXY 4/5 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 施肥の状況
3	TXY 4/5 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 耕作土
4	TXY 4/5 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 耕作土
5	TXY 4/5 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 耕作土
6	TXY 3/4 喀斯特色土 SC しまりあり 耕作なし 耕作土
7	TXY 3/3 喀斯特色土 SC しまりあり 耕作なし 耕作土
8	粘土 (高嶺岩質)

B

AD22/AE24

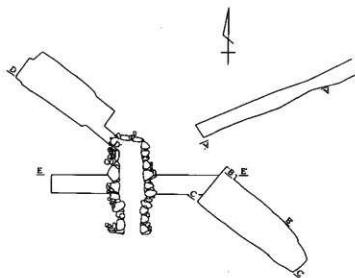
B'

AB22/AC26

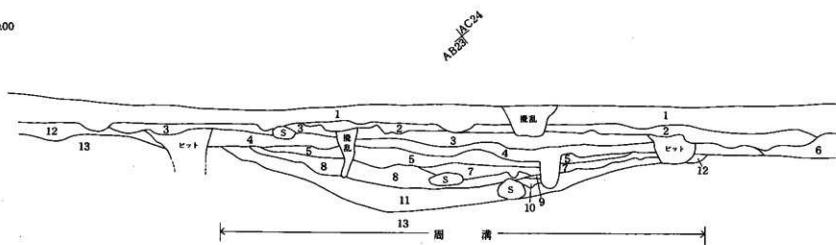
C

AB22/AC24

C'



C419.00



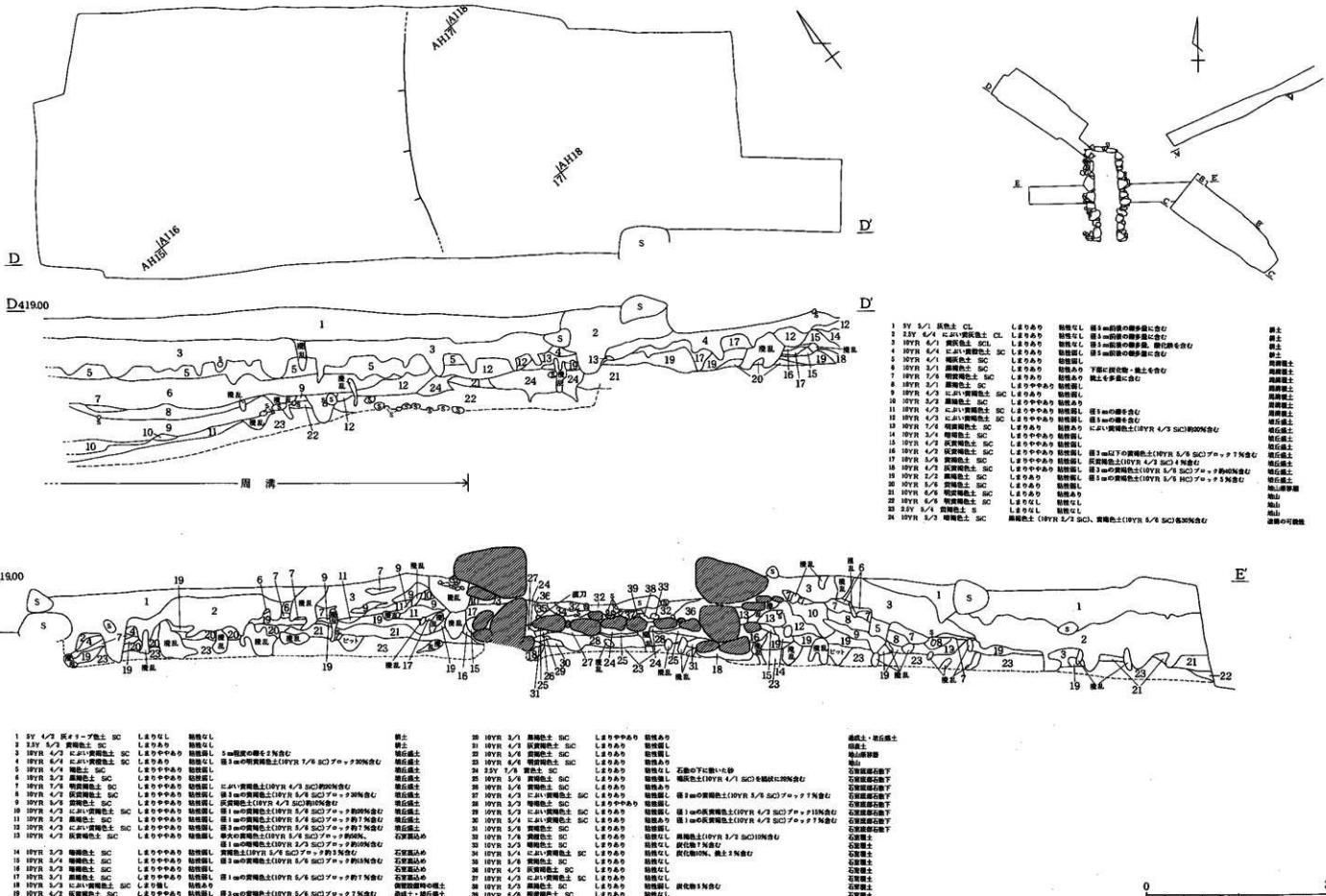
1	TY 4/1 黄褐色土 CL
2	HYR 4/5 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
3	HYR 3/3 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
4	HYR 3/3 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
5	HYR 3/3 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
6	TY 5/2 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
7	TY 5/2 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
8	TY 5/1 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
9	TY 5/1 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
10	TY 5/1 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
11	TY 5/1 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
12	TY 5/1 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む
13	TY 5/1 黄褐色土 SC しまりあり 耕作なし 土壌形成の標準度に合む

C B419.00

1	TY 4/2 黄褐色土 SC しまりなし 耕作なし
2	TY 5/2 黄褐色土 SC しまりなし 耕作なし
3	TY 5/2 黄褐色土 SC しまりなし 耕作なし
4	TY 5/2 黄褐色土 SC しまりなし 耕作なし
5	TYR 4/3 黄褐色土 SC しまりなし 耕作なし
6	TYR 4/3 黄褐色土 SC しまりなし 耕作なし
7	TYR 4/4 黄褐色土 SC しまりなし 耕作なし

0 2m

挿図6 試掘トレンチ (A-A')・南東側調査区 (B-B'・C-C') 土層断面図



挿図7 北西側調査区（D-D'）・墳丘東西トレンチ（E-E'）土層断面図

第2節 埋葬施設——横穴式石室

1. 残存状況（挿図8）

残存していた墳丘のほぼ中央で横穴式石室を検出した。下半分の側壁が完存しており、両袖式の横穴式石室であることがわかる。残存する側壁は、玄室奥壁は最下段のみ2石、西側壁は最下段の側壁が5石、2段目側壁は奥壁寄りでは残っていないが、羨道部寄りで3石残る。東側壁は最下段の側壁が5石、2段目側壁が奥壁寄りで4石、羨道部寄りでは2段目と3段目がそれぞれ2石ずつ残っている。羨道部西側壁は、袖石を含めて最下段が4石、開口部寄りで3段目まで確認できる。東側壁は最下段が袖石も含めて6石、最高3段目まで残存している。前端部の2段目側壁は多少動いている。袖石は西・東側壁ともに2段ずつ残っている。両側壁は前端部まで残っていると判断されることから、本来の石室の平面的な形態・規模を把握することは可能である。

玄室内には人頭大の川原石が平坦面を上に向けて敷き詰められていたが、羨道部に近い部分（図中、攪乱）の石敷は抜き取られたとみられる。羨道部には閉塞石が残存していたものの玄室内で確認されたような底部石敷はなかった。

天井石については、第Ⅲ章 第2節で述べたように、上溝11号古墳から上溝天神塚古墳へ運ばれたとされる石があるが、長さ2m、厚さ1mの巨石であるという。規模からこれは天井石の一部である可能性が高い。上溝11号古墳の周囲には調査時点でも大型の石が残存しており、これらも天井石とみられる。

2. 規模・形態（挿図8）

石室の規模・形態については以下のとおりである。なお、本古墳の石室はややゆがんでいるため、ここで全長とした数値は石室の主軸ライン（玄室・羨道部幅のそれぞれ中心を通る線）を基準にした規模を示している。

形 態	両袖式の横穴式石室
規 模	主軸方向 N 4° W ではば真南に開口する
	石室全長 7.1m
玄 室	全 長 4.4m (西側壁の長さ 4.6m、東側壁の長さ 4.45m)
	幅 奥壁寄り 1.65m、羨道部寄り 1.85m
	側壁残存最大高 西側壁側 1.1m、東側壁側 1.1m
羨道部	全 長 2.7m (西側壁の長さ 2.5m、東側壁の長さ 2.75m)
	幅 袖石部分 1.2m、開口部 1.25m
	側壁残存最大高 西側壁側 1.0m、東側壁側 0.9m
その他	胴張・持ち送り、赤彩認められず

3. 形態的特徴（挿図8～10）

（1）玄室（図版3・10・20～22）

平面形態は基本的に長方形を呈するが、奥壁側に比べ、羨道部側はやや幅が広い。また、主軸ライン（挿図8 E-E'）を基準とすると、奥壁の前面のラインが主軸に直交しないことから、ややゆがんだ長方形となっている。しかし、底部石敷が奥壁際まで敷き詰められていることから、奥壁が原位置を後世改変させられたと考え難く、本来の形状を保っていると判断される。

壁面構成としては、最下段側壁は、東側壁の最下段の石に若干縦に長いものがあるが、基本的に横長の面を石室側に向けて小口積みしている。小口部分の石の大きさは、長さ0.8～1.2m、高さは0.5～0.6m程度である。最下段の上面ではほぼ目地が揃う。石の隙間には20～30cm程度の石が充填されているが、本石室の場合、最下段奥壁・側壁の基底部に、側壁の安定をはかるために、小礫を埋ませているものがある。2段目側壁は、横長の面が石室内に面しているものもあるが、どちらかというと石の長軸方向を奥行としている。2段目より上の側壁は石の大きさが不揃いのため、目地の揃う高さまで2段積みになるところと3段積みのところがある。奥壁と東西側壁の隅はそれぞれに石の端部を合わせて隅角としている。

西側壁は、最下段側壁の構築面は地山であり、高さは418.35mである。東側壁も、最下段側壁の構築面は地山で、高さは奥壁寄りで418.30m、羨道部寄りで418.15mとなり、北から南にかけてやや傾斜した面に設置されている。

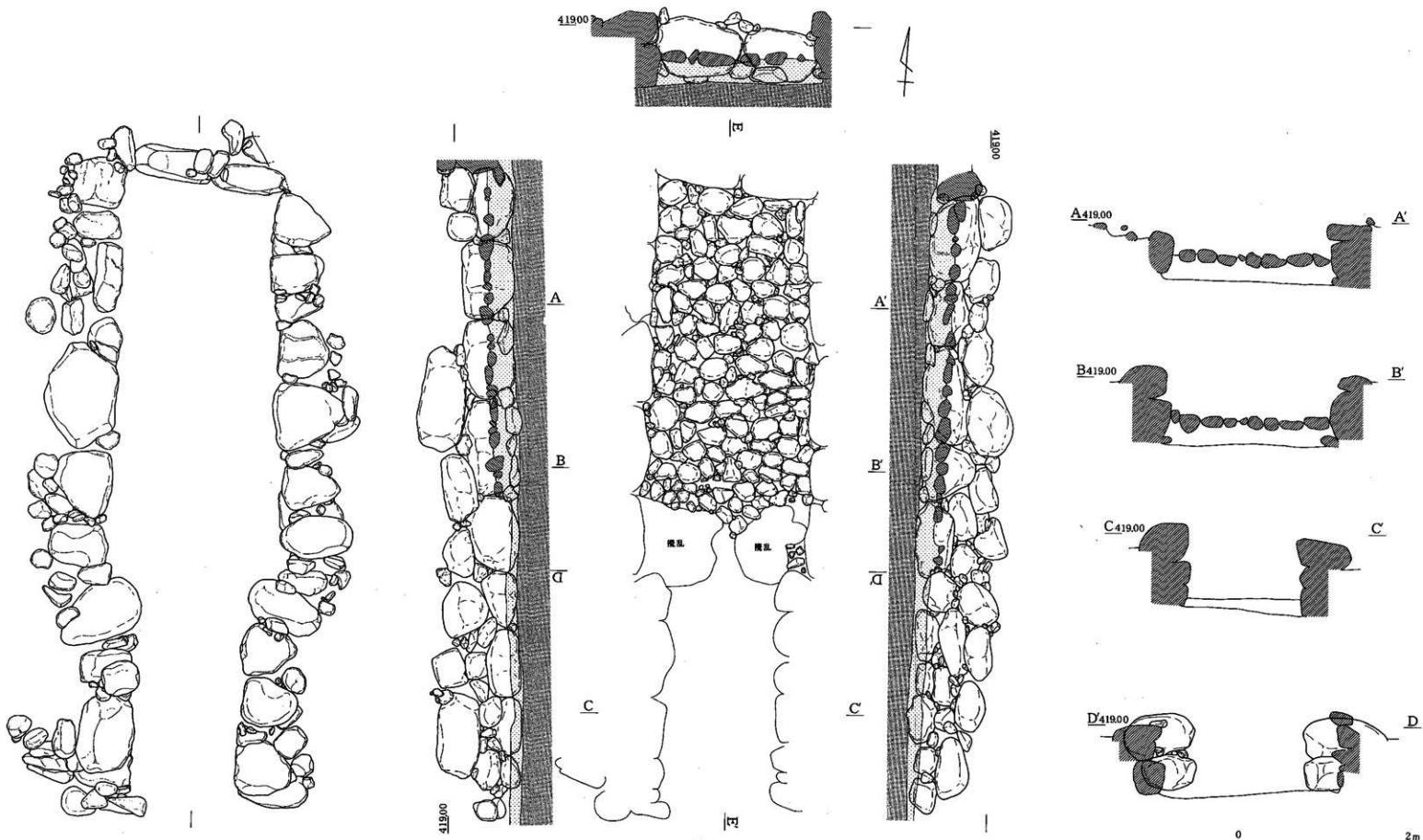
底部石敷は、羨道部寄りの擾乱とした部分を除いて全面に敷き詰められている。基本的に平坦な人頭大の川原石を用いており、その隙間に拳大の石を充填する。擾乱付近でやや石が小さくなっている部分があり（挿図10 →←部分）、部分的には敷き直されていることも考えられる。石敷は側壁構築面の地山ではなく、石室内に入れられた10～15cm程度の土（挿図7 E-E'25～31層）とその上の黄色砂混じりの土（同図24層）の上に敷かれている。石敷は北から南に向かってやや傾斜しており、その差は10cm程度である。特に東側壁は構築面そのものが傾斜していることもあり、全体的に石敷は北西から南東側へ傾斜している。

底部石敷は最終的にすべて取り外し、下の状況を確認した。石の下からは鉄鏹・金環等の遺物が出土している。第V章 第1節で述べるが、これらは本来は石敷上にあったものが石の隙間から落ち込んだものとみられ、石室構築時あるいは底部に石を敷く前段階での祭祀行為といったものを想定するものではない。石敷も当初からのものであり、追葬の段階で一部敷き直された可能性があるものの全体としては当時のものが残っていると考えられる。

（2）羨道部（図版3・17）

平面形態は長方形を呈する。後述する石室前端部列石が羨道部の西側壁で確認できることから、西側壁は前端部まで完全に残っていると判断した。東側壁前端部には列石はなかったが、西側壁との位置関係と両側壁の前端部側壁が横長の面が石室内にではなく、開口部側に向かっていることから、最下段については両側壁ともに前端部まで完存していると考えられる。

壁面構成は、最下段は玄室と同様に基本的に石材を横長に用いている。ただし、前端部のみ羨道部側



插図8 横穴式石室平面図・断面図

ではなく、開口部側に横長の面を向けている。2段目は横長のものもあるが、長軸方向を奥行にしている。羨道部側壁は玄室より全体的に小さく、小口部分の長さが1m程度のものもあるが、小さいもので30cm、大きくて60~80cm程度であることから、玄室の2段目側壁上面の高さが羨道部では3段目側壁上面の高さにはほぼ対応する。西側壁は、2段目の石は袖石以外は全体にさらに小さい石を用いており、隙間に拳大の石を充填する。3段目は大型の石を用い、2石が残る。東側壁は、西側よりさらに小さい。袖石は西・東側壁ともに2段2石が残る。立石ではなく、側壁と同様の積み方である。

西側壁は、構築面は地山であり、高さは418.35mである。東側壁は、構築面は地山であり、袖石付近で418.30m、前端部側で418.15mとなり、玄室からみて最も低くなっている。

底部は、玄室のような石敷は確認できなかったが、玄室内で確認した石敷の下の黄色砂が部分的に検出されたため、この面を底部とした。この底部の高さも側壁構築面と同様、北西から南東に向かって傾斜している。そのため、奥壁と開口部とで25cm程度の差が生じている。

羨道部の底部石敷はもともとなかったのか、あるいは追葬時に取り除かれたものか、両者が想定される。後者の場合、玄室内の攪乱が入った時期との関係も想定できるが出土遺物からは不明である。

(3) 石室前端部列石（図版13）

石室前端部列石とは、羨道部の西側壁前端部に開口部側に面を揃えて積まれている石を指す（挿図9）。この存在から、羨道部西側壁の前端部が本来の形を保っているとしたことはすでに述べた。

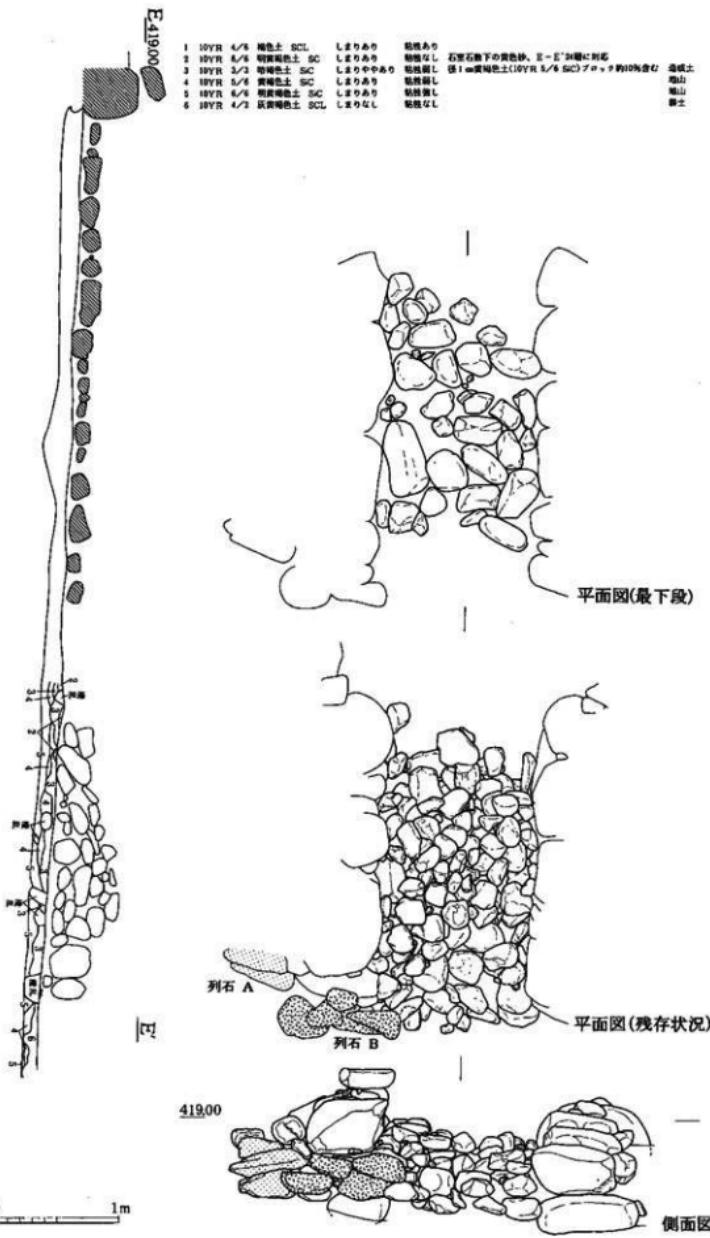
ここで「列石」としたのは、現存部分がすべてではない可能性があるものの「石積」とは言い難く、また側壁の裏込めでもないことによる。比較的近いものに「外護列石」がある。

ところで、横穴式石室の「外護列石」については、横幕大祐氏が論文で、『古墳時代後期における古墳の外部施設の一種』であり、「外護列石が横穴式石室と強く結びつくものである」という観点から、その概念を『横穴式石室導入以後の古墳において、埴丘壇あるいは段壇をめぐる石列で、主体部の構築及びそれに伴う埴丘盛土工程と密接かつ連続的に関わる構造をとるもの。』と定義付けている。

ここでは、横穴式石室の開口部側（石室前面）を意識して積まれた石で、構造上裏込めといった側壁構築に直接伴うものとはやや異なる目的をもって設置されたものを「列石」として記述する。

本古墳の場合、列石はその位置から、列石A - 羨道部西側壁に連結するもの、列石B - 側壁前端部を覆う形のものとの2形態が認められる。列石Aは、最下段と2段目側壁の前端部に連結し、側壁と開口部側に面をそろえるように並ぶ部分であり、1列3段・3石が残る。石は小口積みされ、小口部分の長さは40~70cmである。列石の範囲については周溝との関係からみて、列石が全周するものであるならば、埴丘東西トレンチ内でも確認できると考えられるが、トレンチ内では確認できなかった。もともと石室の周囲を巡るようなものではなく、石室前面のみに設置された可能性が高い。列石Bは、2段目側壁の前面にあり、側壁を覆うように積まれたものであり、2列2段・4石が残存している。やはり小口積みであり、小口部分の長さは30~40cmで、小型の石を用いている。側壁前端部よりやや離れて積まれており、間には土が充填されていた。これが側壁前端部をすべて覆っていたものは不明であるが、この存在から、2段目側壁も前端部まで完存していると判断した。こうした列石は東側壁では認められないが、東側は石室前面のまで削平が及んでいるため、取り除かれた可能性が高い。

なお、横幕氏は、前述の論文で『B類…列石が石室開口部のみに構築されるもの。範囲はおおむね片



挿図9 閉塞石断面図 (E-E')・側面図・平面図

側が石室玄室幅の2倍程度に収まるものを目安とする。』とし、これを『墳丘を「外護」するよりもむしろ古墳の正面観を整える程度の機能しか果たし得ない。』と述べている。

こうしたことから、古墳を全周し、古墳の墳丘盛土作業の工程と密接に関係するものを外護列石というのであれば、本古墳の場合はそれとは異なる構造物と考えられる。本古墳の列石が石室構築のどの段階に配されたかは不明であるが、列石の下端が羨道部前端部最下段の側壁の基底部よりも上であり、むしろ石室石敷の高さに近いことから、石室底部への石敷の段階で積まれた可能性もある。

また、この列石がもし古墳の正面観を整えるためのものとすれば、本来古墳の墳丘盛土表面に葺石のように露出していたことも考えられるし、いわゆる外護列石と同様に盛土に覆われていた可能性もあるが、判断することはできなかった。いずれにせよ、列石が古墳の前面を意識して設けられたことは確かであり、列石の存在は古墳の復元にも大きく関わってくるといえる。石室は墳丘建築面よりやや低い位置に構築されているが、底部の高さと墳丘建築面との高さはほぼ同じであり、前端部と周溝との位置関係からみても、石室の開口部に平坦面が存在し、前庭部があったことも想定される。

(4) 閉塞石（図版13～17）

閉塞石は羨道部のはば全体に残存していた。最も残っている部分は羨道部中央付近で、高さ50cm程度である。閉塞石の一部が若干羨道部外側にも崩れて散在していたが、羨道部内のものについては、閉塞石内の中から若干陶器等が出土するが、基本的には追葬を含めた古墳使用時の最終的なものが残存していると判断される。

閉塞石内からは須恵器の甕（挿図21-16）や鐵鐵片が出土しており、これらは追葬時の混入と考えられる。このほか、玄室寄りの閉塞石の上から須恵器の蓋坏（挿図21-8～15）がまとまって出土していることが注目される。しかし、閉塞石から追葬の過程を復元することはできない。

玄室内には底部のはば全面に石が敷かれていたことから、羨道部にも同様の石敷があるものとして、閉塞石を取り除く際、最下段の石を残したが、これらの石は大きさもまばらで、平坦面を揃えて並べられていないことから、この最下段の石は羨道部の底部石敷ではないと判断し、最終的にすべての石を取り除き、羨道部の底部を確認した。

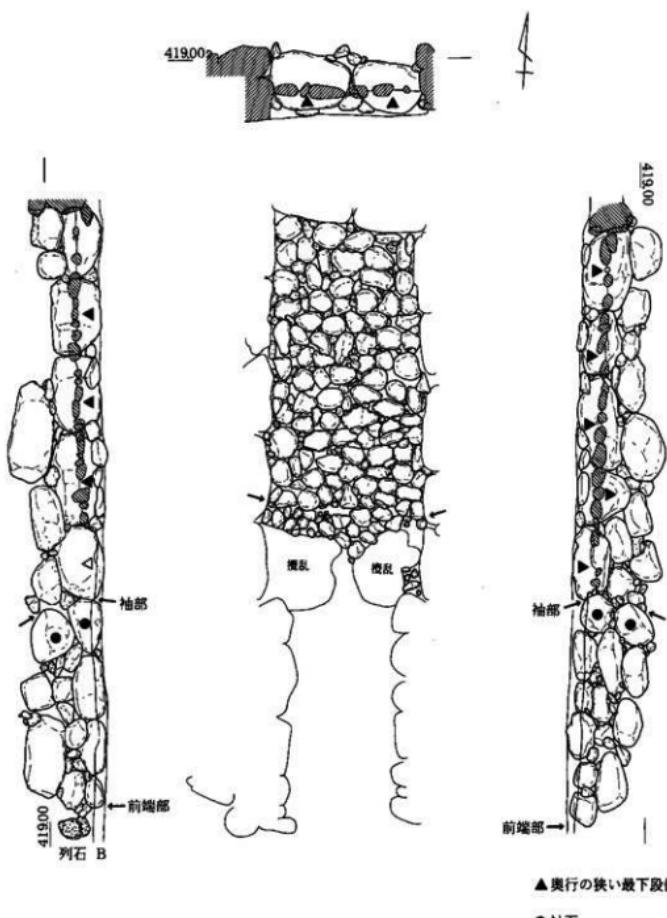
羨道部の石敷が閉塞石を崩す際（追葬時）に取り除かれたとしても、その時期を特定するものは確認できなかった。ただ、閉塞石の上にあった蓋坏の時期よりは以前とみられ、蓋坏が置かれた段階では閉塞石はすべて取りはずされたわけではないということになる。

4. 構築方法（挿図8・10）

(1) 石室構築面

第3節で詳述するが、石室は古墳建築面を石室部分のみやや掘り廻めてから、側壁の設置を行なっているとみられる。基本的には側壁の積み上げと並行して順次盛土を行ったことが考えられる。

石室は、墳丘建築面をやや掘り込んで地山に設置されているが、石室構築面は北から南に向かって低く傾斜した状態で、石室を構築している。



挿図10 横穴式石室の特徴

▲ 奥行の狭い最下段割壁

● 袖石

(2) 石積方法（図版3・8～12・20～22・24・25）

側壁の残存状態が悪いため、石室構築工程については不明である。しかし、本石室の石の積み方にはいくつかの特徴がある。特に玄室についていえることだが、最下段の石は石室内からみた見かけの大きさは、2段目より上の石に比べても比較的大きく、大きいもので長さ1.1m、小さいもので0.8mあり、一見最下段には安定性確保のため、大型の石を用いているかのように見える。ところが、西側壁の奥から2番目の石などが特に顯著であるが、奥行が30cmほどしかない。この石の裏側に散在している人頭大的石は裏込めの残存とみられる。東側壁の最奥部の側壁も奥行40cm程度で、最下段の側壁はいずれも30～40cm程度である。これに対し、2段目の側壁は西側壁に大型の石があるものの多くは最下段の石に比べると小さく、石室内からみた長さは60～80cmであるが、奥行は60～80cmあり、最下段の石よりも奥行がある。そのため、裏込めだけではなく、最下段の側壁基底部の石室内に面した前面に拳大の石を噛ませているものが多い。また、そのせいかやや内傾しているものもある。

側壁をすべて取り外して確認していないが、墳丘東西トレンチ等での状況を見ると、最下段の石の裏込めは、奥行の広い2段目の石をのせる際の安定を図る目的も兼ねている。こうしたことから、最下段の石の配置は、石室構築当初からの計画に基づくものであり、安定よりも広い面を確保する方を優先させた結果であろうか。

石室の底部が最下段側壁の基底部の高さに敷かれていたのではなく、あえて石室内に10～15cmの土を入れ、側壁の下を埋めてから、石を敷いているのも、最下段の石を安定させるためとも考えられる。

(3) 玄室と羨道部の関係（図版11・12）

玄室と羨道部の構築工程については残存部分だけでは把握しえない。ただ、玄室の西側壁と東側壁の長さが違うことから、結果として平面形態が歪んだ長方形を呈している。これに対し、羨道部はゆがみが少ないと。このことから、一つとして最下段側壁は、石室の前端部を基点として積まれていることが考えられる。まず、羨道部前端部の位置を決めて袖部まで石を配置する。玄室は袖部の位置に合わせて羨道部側から奥壁に向かって石を配置していくが、石材配置の関係から西・東両側壁の長さが違ってきてしまい、奥壁前面のラインが主軸に直交しなくなってしまう結果となる。

いざれにせよ、玄室と羨道部は使用石材の大きさが異なることや、玄室と羨道部の両方にかかる石がないことから、現存部分については玄室と羨道部別々に積まれたことが推測される。

5. 石室石材

本石室の側壁にはものによっては1m以上もある巨大な礫が用いられている。表面に角は少なく、何処かの河川等から搬入したとみられる。これについて、供給源を明らかにするため、飯田市美術博物館学芸員　村松氏に、礫の表面を肉眼観察により分類していただいた。

それによると、石室に使用された石材は濃飛流紋岩が2点・不明の岩石（変輝綠岩か）が1点、わずかに用いられているものの、他は全て花崗岩のことである。飯田下伊那地方の花崗岩は、幾つかに細分されているが、そのうちの伊奈川花崗岩および市田・清内路花崗岩が用いられているとのことである。伊奈川花崗岩は、均質であるが中粒～粗粒で少し片理が認められる。また岩相変化が著しい。木曾山脈の主要部分を形成している岩石である。

市田・清内路花崗岩は、細粒～中粒で片理構造が認められず均質である。思いどおりに割れるため、飯田下伊那地方では石垣の石材としてよく利用されている。高森町市田を中心に木曾山脈の東麓に分布しており、この付近では上郷地区野底川上流や松川町片桐松川一帯でよく観察される。

濃飛流紋岩は、火碎流堆積物が高温のため溶結した岩石であり、伊那谷ではチャートに次いで風化に強く、堅牢な石材のことである。恵那山から飛騨高山まで西方に広く分布している。今次調査地点付近では、段丘疊層および飯田松川扇状地の疊層中に稀にではあるが認められることがあるから、飯田松川川原に存在しても無理はない。だが石室部材に用いられるような、一辺が1m前後あるほど大きなものが存在するかは不明のことである。

上記両花崗岩は飯田松川および天竜川河川敷に分布し、松尾地区においては普遍的な石材といえる。また、竜東に分布する天竜軒花崗岩や上伊那郡に分布する木曾駒花崗岩等は認められない。よって花崗岩から見た限りでは、本古墳築造にあたっては、松尾地区の古墳勢力圏外の他所から、特別に石材を搬入した証拠は認められない。飯田松川・天竜川河川敷等、近隣から搬入したと見るのが妥当である。しかし、これほど大きな濃飛流紋岩の産出地点は不明であるので、近隣のみで採取したという、結論は出せない。

近隣河川敷には上記3岩石の他にも別の種類の花崗岩や岩石があり、中には風化しやすいものや圧力に弱い種類も多く存在する。本石室に用いられた花崗岩は、上述の石材の中でも細粒で優白色が多い傾向が指摘できるという。花崗岩は細粒であるほど石材としては優れているといわれることから、石材を選択するにあたり、形や大きさに加え、意図的に耐性の強いものが選択された可能性も指摘できそうである。

石材採取地候補としてまず想定されるのは河川敷である。しかし、河川のみではなく、近隣の地下に求めた可能性もある。仮に濃飛流紋岩の産出地が、近隣では段丘疊層や扇状地堆積層にのみ限定されるようであれば、その可能性は高くなる。また、今次調査とは別に、埋蔵文化財試掘調査・立会調査で、飯田松川沿いの低位段丘や氾濫原の地下に、石室の部材として何ら遜色のない巨礫が数多く存在することを目撃してきている。本古墳に限らず、現飯田松川・天竜川河川敷よりも疊層の方が古墳に近い距離である場合もあり、その可能性も捨てきれないといえる。ちなみに同じ飯田松川沿岸の鼎地区「切石」という地名は、河川敷に加え、地下にも多く存在する巨石を石材として利用したことから付けられた地名であるという。

なお、側壁以外の閉塞石・裏込めおよび底部石敷等に用いてある人頭大の川原石は、大多数が花崗岩であるが、緑色岩・硬砂岩が認められ、天竜川および・飯田松川河川敷より供給したとみられる。

第3節 墳丘盛土および石室構築工程

本古墳は、墳丘・石室全体が残存しておらず、調査でも最終的に石室・墳丘盛土のすべてを取り除いて、盛土の状況や石室の設置に関して面的な把握をしておらず、以下に述べる墳丘盛土・石室構築工程は石室の主軸にほぼ直交する墳丘東西トレンチでの断面観察を基に、部分的な掘り下げ等により推定したものである。ただし、このトレンチも東西においては周溝まで達しておらず、古墳全体を把握するものではない。本古墳は、基本的に現地形を整地し、ほとんどを盛土によって構成されている。盛土は側壁を1段積むごとに盛土を行なっていくという方法をとっている。

1. 墳丘東西トレンチ（挿図7 E-E'）の状況（挿図6・7・11、巻頭図版3・図版22～26）

① 第I・I'工程（土層21・22・23層）——墳丘築造面の設定

I（22・23層）は地山であり、これと同様の層は他の調査区でも確認できる。墳丘東西トレンチでは石室の西側で地山と部分的にI'（21層）とした旧表土が確認できるほか、羨道部の西側壁外側での補助的なトレンチでも旧表土が確認できる。古墳はこの地山ないしは旧表土を整地した上に築造されているが、西側の方で旧表土が残っているので、築造面は西から東へ低くなっている。北西側調査区では、旧表土は確認できず、地山上に盛土がなされている。南東側調査区では後世の耕作・造成等により盛土が削平されおり、地山は確認できるが、築造面が地山か旧表土かの判断はできない。

この状況は、一つには自然地形が北西側から南東側に向かって低くなっていることと関係していることが考えられる。古墳が立地する地形は、標高418～419mで南東側に向かって傾斜している。おそらく地山・旧表土も同様、北西側から南東側に向かって低くなっていることが想定できる。

築造面の傾斜により、石室側壁の基底部自体も北側奥壁に比べ南東側の羨道部側壁前端の基底部がやや低くなっていることから、最終的に石室構築にまで影響が出ている。

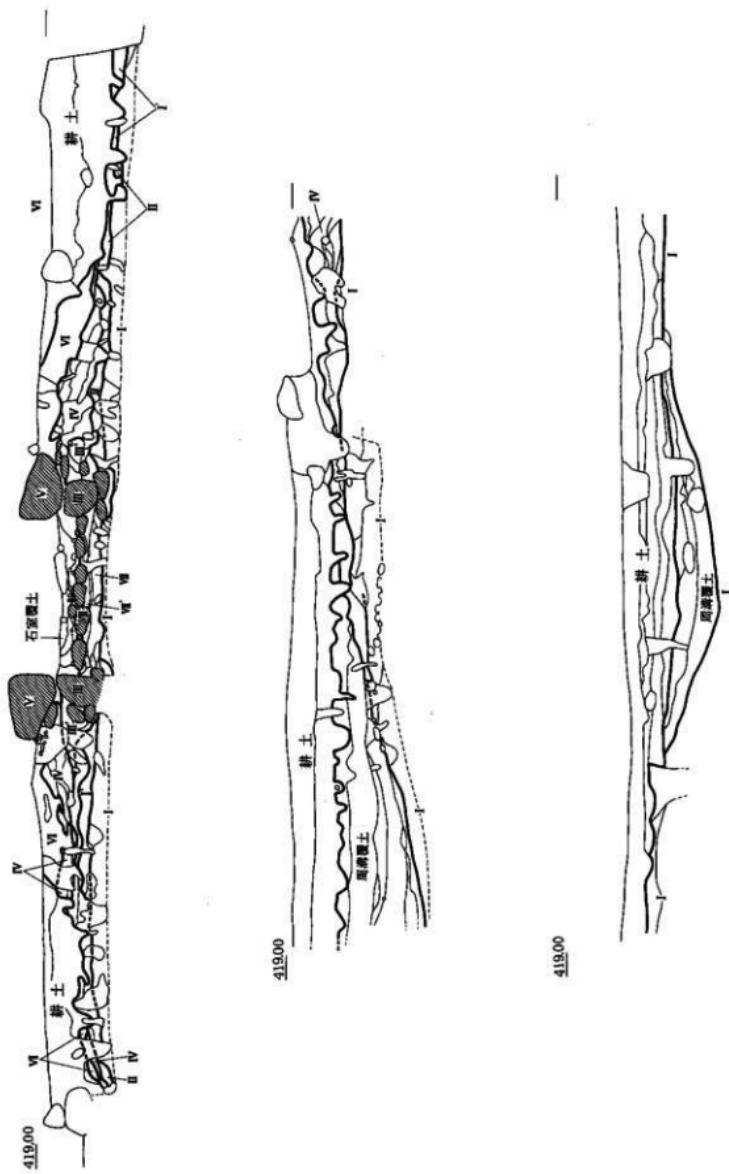
② 第II工程（19・20層）——古墳築造面の整地

II（19・20層）は、地山および旧表土の上に堆積している。土層注記にもあるように、旧表土に近い色調であるが、地山とは区別できる。これを盛土の一部とも考えられるが、旧表土との関係から、一つには築造面を平坦にする際に土をならした結果のものとの解釈もできる。結果的には盛土の一部にもなっている。

③ 第III・III'工程（最下段側壁・13～18層）——最下段側壁の設置

石室の外側では旧表土が確認できるが、西・東側両側壁の構築面は地山であり、墳丘盛土の築造面（整地面）の高さよりも若干低くなっている。墓壙というほど深いものではないが、側壁設置にあたっては周囲よりも若干掘り廻めた中に石室が構築された可能性が考えられる。18層は側壁の安定や高さの調節のために入れられた土であろう。おそらく、第II工程の整地面から掘り込まれていると考えられる。

本古墳の最下段側壁は、石室内部に面した部分に石の最も広い平坦面を用いており、そのため奥行が狭いことから、安定のために側壁の前面（石室内部に面した部分）や裏側に20～30cm程度の川原石を噛ませているものとみられる。裏込めの石と土は最下段側壁の安定をはかるとともに、狭い奥行をカバーするものとなっている。



挿図11 墓丘および石室構築工程

④ 第IV工程（5～12層）——最下段側壁に伴う盛土

最下段側壁の裏込めを覆うように盛土がなされる。版築状ではないが、層状をなしている。石室寄りが高く、外側に向かってだんだん低くなる。

北西側調査区で確認した盛土（挿図7 D-D' 12～19層）は、地山の上にあることから、最下段の側壁（奥壁）に対応する盛土とみられる。この部分では、第III工程に対応する奥壁の裏込めを把握することはできなかった。

⑤ 第V工程（2段目側壁）——2段目側壁の設置

2段目の側壁が積まれる。2段目の側壁は最下段の側壁に比べ、奥行があることから、最下段の側壁にのっているというよりも最下段に伴う裏込めないし盛土（Ⅲ・IV工程）の上に積まれているといえる。側壁の上端面を平坦にし、側壁の安定を図るために石の下に小砾を入れ込んでいる。

⑥ 第VI工程（3・4層）——2段目側壁に伴う盛土

2段目側壁には最下段側壁のような石を入れた裏込めは明確に認められず、墳丘全体の盛土と一体になっている。

現状で確認できる盛土工程は以上であるが、実際には側壁の積み上げと盛土を順次行なっていく。

次に石室内の状況であるが、石室本体が完存していない状態で、石室内の石敷といった内部の整備がどの段階で行なわれたかはわからない。ここでは、内部の整備が石室構築後になされたと仮定する。

⑦ 第VII・VII'工程（24～31層）——石室内部の整備

玄室の底部には川原石が敷かれているが、石室の設置面となる地山の上に敷かれるのではなく、10～15cm程度の土を入れている。この土の上には黄色砂（24層）がほぼ石室全体に入れられており、石はこの上に敷かれている。この土は底部石敷が確認できなかった羨道部側にも認められ、黄色砂も部分的にはあるが、羨道部側でも認められる。のことから、羨道部にも本来石敷があった可能性がある。

石室内の土と砂は、側壁の安定を図るとともに、むしろ石室の排水の目的もあると考えられる。

⑧ 第VII工程（底部石敷）——石室の完成

石室内に石を敷き詰める。

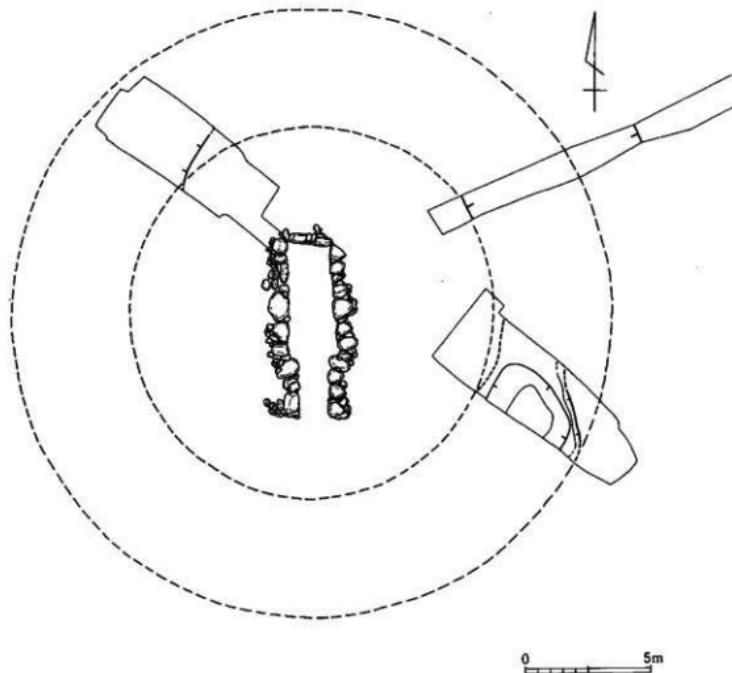
2. 羨道部の状況（図版15・18）

羨道部側については、側壁は最大3段目まで残存していたが、これに伴う墳丘部分は削平により断面でも盛土との関係を明確に把握できなかった。羨道部は玄室の最下段側壁のような積み方はしていないため、小砾を充填するような裏込めは認められないが、おそらく玄室側と同様、石の積み上げと盛土を併行して行なっていたと考えられる。ただし、前節でも述べたように側壁の設置が玄室側と羨道部側とで分けてなされていたとすれば、玄室側と羨道部側とでは石室の積み上げと墳丘盛土の工程に若干の差があることも考えられるが、今回の調査では把握できなかった。

第4節 古墳の規模・形態復元

本古墳は円墳とされてきた。調査により、周溝の全体を知ることはできなかったが、周辺の状況等から円墳と考えたい。周溝のみでは古墳の規模の復元には足りないが、以下の前提を基に復元した古墳は挿図12のとおりである。

- ・石室は古墳の中央に位置し、石室の主軸線上の1点に古墳の中心がくるものとする。石室構築と盛土は一体化しており、盛土は石室を中心に同心円を描くようになされているとみられる。
 - ・石室前端部列石の存在から、前庭部や墳丘の段築成については不明であるものの、本古墳は石室前面を意識している。
 - ・確認された周溝内側の掘り込みが、およそ墳丘盛土の範囲を示している。
 - ・周溝の幅は、周溝を掘削した南東側調査区で確認されたものを基準とする。
- 以上の前提から推定される古墳の規模は、全長約24m（周溝含む）、墳丘長約14m、周溝幅約5m。



挿図12 墳丘復元図

第V章 出土遺物

第1節 石室内遺物出土状況

1. 検出状況

石室内から出土した遺物は、覆土中にあるもの、底部石敷上にあるもの、石敷の下にあるものがある。底部に近いものは原位置を保っている可能性が高いが、横穴式石室の性質上、追葬と追葬時の移動、後世の土の流入による移動とを厳密に区別することは難しい。ただし、覆土の堆積状況から上部からの削平に伴い、内部が大きな搅乱を受けている可能性は少なく、入口からの土砂の流入等とみられる。

遺物は、位置の確認できるものは出土地点を把握し、小破片や搅乱、築によるものについては、石室内を約1mのグリットに分け、出土位置を把握した。棺材および釘等が不明なため、個々のまとまりを把握し難いが、本石室は後世のいわゆる盗掘を目的とする破壊を受けていなかったとみられ、調査時点で把握した遺物の出土位置は石室が墓として使われていた当時の最終段階の状態を反映している可能性が高い。

2. 出土状況（挿図13・14、巻頭図版2・図版4～7）

遺物は、原位置を保っているものとして、グリット2の須恵器（蓋）類（挿図20-5～12）とグリット10・12の羨道部閉塞石の上に置かれた須恵器類（挿図21-8～15）がある。しかし、これらも後の追葬による二次的な配置の結果であるとの可能性は否定できない。ここでは、グリットごとに遺物の出土状況を述べていく。

〔グリット1〕—石室の北西隅の一画からは、主に金属製品が集中して出土している。馬具（轡・鉄具・留金具）（挿図17-1～3・18-3・5～10）・銀環（挿図19-8）がある。石室全体に散在している鐵鐵片（挿図16-7・9）も比較的このグリットからの出土が多い。また、銀象嵌を施した柄頭が出土しているが、刀身は1m程離れたグリット5で出土している。金属製品はいずれもまとまりではなく、石敷より浮いている。こうした状況から、原位置を移動しているとみられるが、本来この付近を中心置かれたものか、ここに寄せられたかのいずれかである。このほかには土師器（高坏）（挿図20-2・3）が出土している。

〔グリット2〕—須恵器（有蓋高坏）（挿図20-4）が奥壁に寄りかかるように石敷上から出土し、須恵器の蓋のみ8点（挿図20-5～12）が並べられた状態で出土した。両者はほぼ完全な形で残っていた。須恵器の有蓋高坏と蓋類は、ほぼ底部上から出土しており原位置を留めている可能性があるが、後者は蓋のみであることから、二次的な配置とも考えられる。ただし、これらの蓋とセットとなる坏身等は石室内からは出土しておらず、後の追葬時に坏身のみ持ち出されたものであろうか。須恵器の脇から金環（挿図19-3）が出土している。東側壁際から直刀（挿図16-1）が出土している。直刀は切先を北に、刃部を東に向いている。2分割され10cm程度離れていたが、中心部は欠損している。石敷から浮いた状態で出土している。この直刀の鏃（挿図16-2）とみられるものが東側壁外から出土している。このほか、土師器（高坏）（挿図20-1）が出土している。

〔グリット3〕—グリット3から4にかけて炭化物・焼土（Na1001）が底部石敷上から出土しており、

この部分の石の一部が焼けている。遺物の出土は多くはないが、貴金属・留金具（挿図18-1・2・4）が出土している。これらは、グリット1の出土品と類似することから、混入といえる。また、雲母片（Na1008）が出土している。

〔グリット4〕—Na1001内から、火を受けているとみられる銀環1点（挿図19-11）が出土している。

〔グリット5〕—グリット1で述べた柄頭とセットになる直刀（挿図15）が西側壁際の石敷上から出土している。切先を南に、刃部を東に向いている。柄頭も直刀と同様、背を西に向いている。貴金属が離れた位置から出土し、鍔や鞘尻金具等の刀装具の一部は残存していなかった。このほかに、金環2点（挿図19-1・2）がある。このうち1点（1）は石敷の下からの出土であるが、この部分には小動物等による攪乱が入っており、石の上から落ち込んだものと考えられる。

〔グリット6〕—須恵器（挿図20-17）・刀子（挿図16-11）が出土している。

〔グリット7〕—須恵器2点（挿図20-15・16）・金環1点（挿図19-4）が出土しているほか、炭化物・焼土・骨（Na1004）が出土している。

〔グリット8〕—銀環1点（挿図19-7）のほか、炭化物・焼土・骨（Na1003・1005・1007）が出土している。

〔グリット9〕—このグリットは玄室と羨道部の両方にかかる。玄室内では7と9とにまたがって底部石敷が欠落している部分があり、攪乱とした。攪乱内には炭化物・焼土・骨（Na1002）があり、小礫が混入していたほか、銀象嵌柄頭のある直刀に伴うとみられる貴金属（挿図16-4）が出土した。火葬墓としての使用等が考えられるが、この攪乱内には、石室内の遺物が混入しており、この攪乱に直接伴う遺物はなく、時期を特定できない。また、羨道部内では須恵器（挿図21-5）と玄室の攪乱内に混入していたものと接合する土器師（挿図21-1）が出土している。この2点は閉塞石の上にあった。

〔グリット10〕—グリット9と同様、玄室と羨道部の両方にかかるグリットである。8と10にまたがって、グリット9と同様の攪乱がある。この攪乱にも炭化物・焼土・骨（Na1006・1009）が混入しており、ここから銀環（挿図19-9）が出土している。攪乱内に混入していた須恵器（挿図21-2）の破片が玄室と羨道部に散っている。また、玄室の南東隅で袖石によりかかるように須恵器（フラスコ形瓶）（挿図20-18）が出土している。袖石にあたっていた口縁部が欠損しているが、ほぼ完全な形であった。この須恵器の下には若干石敷が残っていたが、石は小さいものである。グリット9と10の攪乱は状況から、ほぼ時期を同じくして、同じ目的でなされたとみられるが、時期は特定できない。両攪乱を掘り下げたところ、石室石敷の下の黄色砂が部分的に確認された。羨道部内では、須恵器（蓋坏）の身と蓋が並べられた状態で8点（挿図21-8～15）出土している。残存していた閉塞石の上に置かれており、閉塞石がこの上に転落したためか破損はしていたが、いずれもほぼ残っていた。意図的に配置されたとみられるが、すべての蓋と身がセットにならないので、二次的な配置の可能性がある。須恵器の周囲からは鉄鑄片や金環（挿図19-6）が出土している。

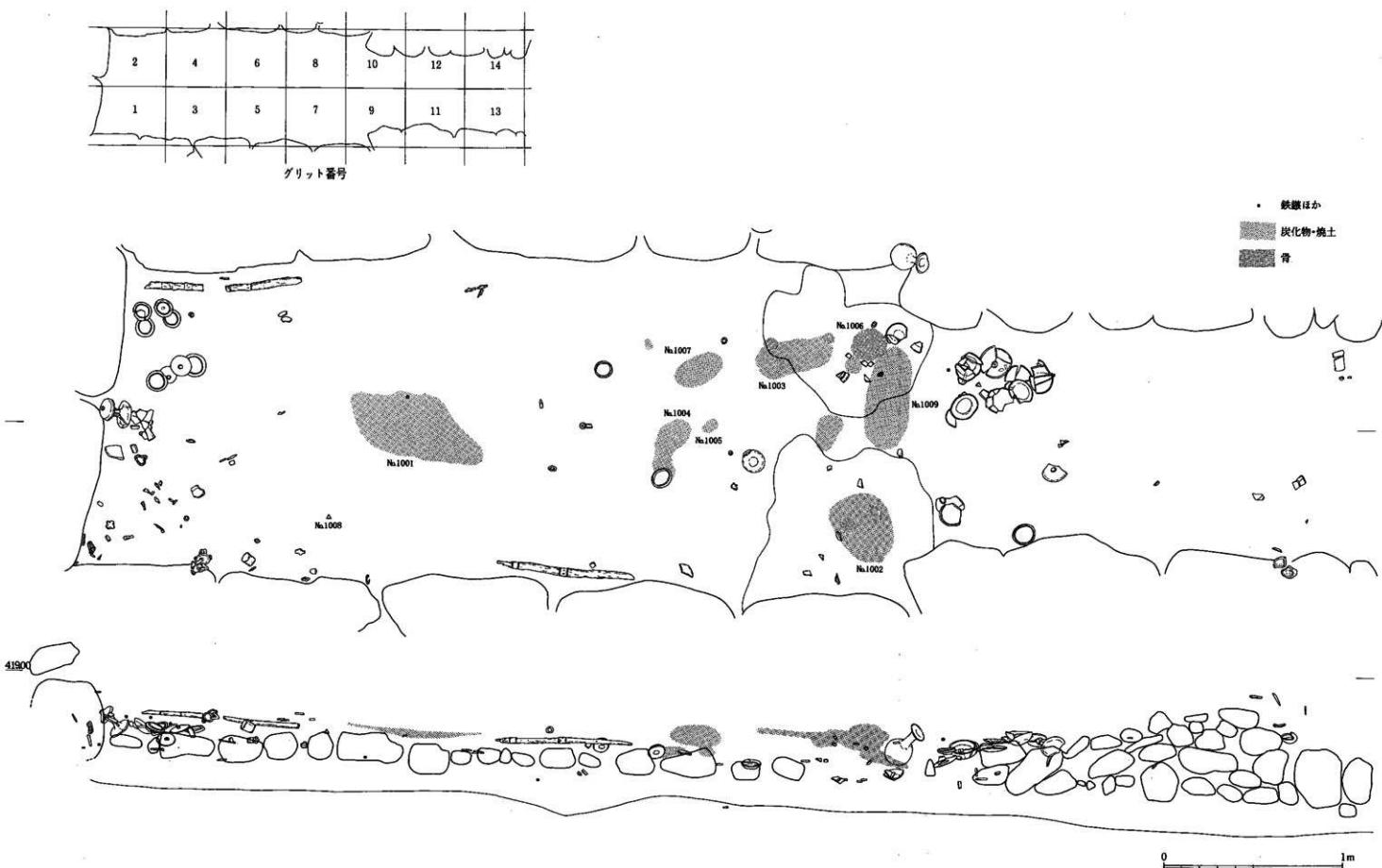
〔グリット11〕—須恵器2点（挿図21-6・7）が出土している。閉塞石の上からの出土である。

〔グリット12〕—10で述べた須恵器群がある。

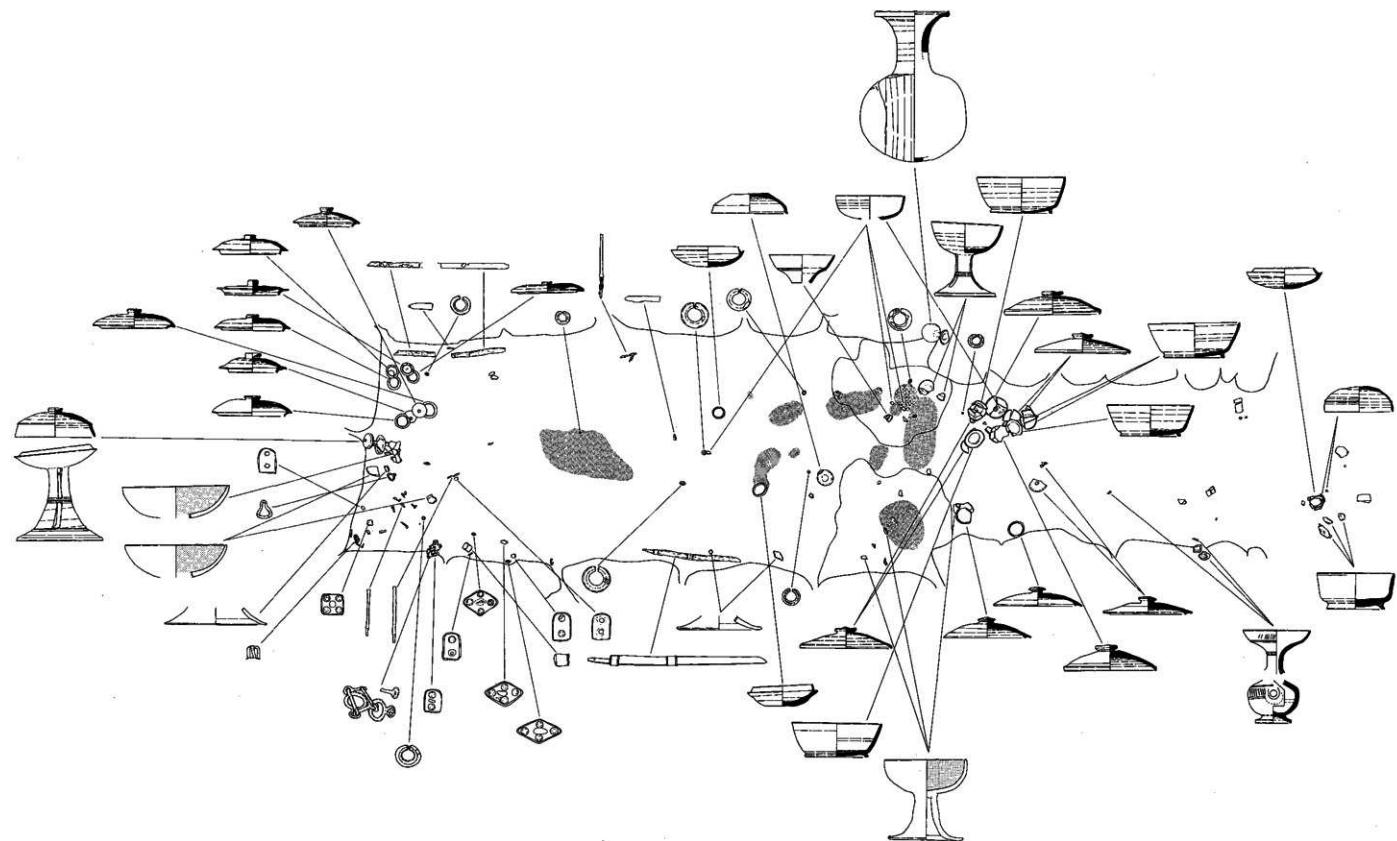
〔グリット13〕—閉塞石の間から須恵器（題）（挿図21-16）が出土している。追葬時の閉塞石の移動の際に混入したとみられる。閉塞石上部には陶器片がごくわずかであるが混入している。

〔グリット14〕—閉塞石の中から須恵器片がわずかに出土しているのみである。

また、閉塞石の外側では、須恵器（坏蓋・身）（挿図21-17～19）が出土している。いずれも原位置ではなく、追葬の際に石室内から搔き出されたものとみられる。このほかに、篠いにより出土した玉類



插図13 遺物出土状況



插図14 出土遺物配置図

はグリット2・5・7、金環はグリット7、銀環はグリット4から出土している。また、鉄鎌は石室全体（グリット1・9・11～14）から出土し、いずれも小破片で、接合して全体の形が把握できるものはわずかである。

第2節 出土遺物

1. 武器・馬具

(1) 装飾付大刀（挿図16-1、巻頭図版4・5・図版30・31）

銀象嵌を施した鉄製柄頭はグリット1から、刀身は約1m離れたグリット5から出土しており、追葬時の移動が考えられる。

刀身は完存している。全長80cm、刃部長67.5cm、刃部幅3.0～4.0cm、背厚0.9cm。関部に金銅製の鍔（4.1×3.7cm）が残存するが、上に鞘口金具がかぶさっている。茎部に目釘孔1孔があり、一部に柄の木質が残る。鞘の木質部分はほとんど残っていないが、金銅製の鞘口金具（4.6×3.7cm）と鞘間金具（4.4×4.3cm）が残存する。鞘間金具には佩裏側に2本の切り込みを入れてある。切り込みの長さ1.7cm、間隔は1.2cmで、佩用の金具を兼ねている。足金具が出土していないことから、綴佩きとみられる。

刀装具としては、貴金具2点が離れて出土しているほか、锷・鞘尻金具は確認できなかった。

柄頭は鏽ぶくれがみられるが、長さ6.3cm、幅は基部4.8cm、頭頂部5.1cmで、頭頂部側がやや広がった形態となる。背部側の幅は3.5cm。厚さは内部の鏽のためはっきりしないが、0.3～0.4cm程度とみられる。断面はやや卵形をした楕円形で、墳頂部は側面からみるとやや丸みを帯びている。墳通孔はない。柄頭の基部には金銅製の切羽が付いている。切羽はほぼ楕円形で、大きさは5.3×4.1cm、厚さ0.25cmである。柄頭と切羽を合わせた重量は214gである。

銀象嵌は佩表・背部・頭頂部に施されていたが、いずれも剥落があり完存していない。佩裏には象嵌は確認できなかったが、本来施されていなかったのではなく、佩裏を上にして出土したことから、追葬や土砂の堆積により上を向いていた佩裏表面の剥落が他の部分より著しかったと考えられる。本柄頭の象嵌文様は亀甲文や龍文といった明確な形をとっていない。佩表の基部には平行する2本線の間にC字状の連続文が施され、その上に2本線による波状の文様がある。さらに墳頂部に近い上部の文様は不明である。背部は綴2本の平行線の間に4つの同心円文が施されている。頭頂部の文様は剥離が著しいが、佩表上部の文様に類似しているようである。最も近似するのは岡山県緑山17号墳例ということである。柄頭の形態についても、円頭・方頭の中間形態といえ、いずれの典型例にもあてはまらない。ここでは、緑山17号墳例と同様に、銀象嵌を施した鉄製円頭柄頭の一形態と考えたい。

なお、象嵌の分析、保存処理時の観察所見については付編による。

(2) 直刀（挿図16-1、図版32）

玄室の北東隅から出土した。出土時点では大きく2つに折れ、10cm程度離れて出土した。しかし両者は接合せず、周辺からも破片は出土しなかったことから、刀身の中間が欠損した状態である。また、茎は目釘孔から茎尻が欠損しているため、全体の長さは不明である。切先にわずかに鞘の木質が残存するが、锷や刀装具は伴っていない。ただし、東側壁外から出土した鉄製品（同図-2）が锷とみられ、本直刀に伴う可能性もある。残存長71.8cm、刃部残存長69.6cm、刃部幅3.0～3.3cm、背厚0.6cm。

(3) 刀装具(挿図16、巻頭図版6)

装飾付大刀・直刀に直接伴わないが刀装具が出土している。追葬時等に本体から分離したとみられる。

3はグリット4・5から出土した貴金属である。半分を欠損している。原位置を留めていないため、どちらの直刀に伴うかは不明であるが、鉄製品であることから、1の直刀の可能性がある。現存長3.7cm、厚さ0.4cm。

4はグリット7・9の攪乱内から出土した金銅製の貴金属である。完存している。大きさは4.3cm×2.7cm、厚さ0.45cm、重量4g。同様の貴金属がグリット4から出土しているが、欠損し折れ曲がっているため、図化していない。材質からいざれも装飾付大刀に伴う可能性がある。

5はグリット1・2から出土した鉄製品である。弯曲する形態から鎌等とみられる。1の直刀に伴う可能性がある。

(4) 鉄鎌・刀子(挿図16、図版32)

鉄鎌はいざれも破片であり、原位置にあるものはない。刃部形態が確認できるものは少なく、図化できたのはわずかであるが、破片はおむね長頭鎌とみられる。

6はグリット1・6から出土した片刃長頭鎌である。刃部の一部と頭～茎部を欠損している。残存長11.3cm、刃部長3.5cm。

7～10はいざれも刃部を欠く。7・9はグリット1、8はグリット4、10はグリット13・14から出土。7～9は角関もしくは台形関、10は刺状関とみられる。8は矢柄の一部が残存する。残存長は7から順に12.1cm(茎部残1.9)、13.7cm(茎部4.5cm)、10cm(茎部残1.6cm)、3.9cm(茎部残1.7cm)。

11はグリット6から出土した刀子の刃部、12はグリット2から出土した目釘孔のある茎部である。いざれも欠損しており、原位置ではない。残存長は11が7.5cm(刃部幅1.3cm)、12が5.2cm(幅1.6cm)。

(5) 鉸具(挿図17、図版32)

1はグリット1から出土した鉄製鉸具で、2つの鉸具が組み合わされた状態で出土した。いざれも縁金の一部が刺金軸となる環状形鉸具で、縁金は完存している。1-aの刺金は先端を欠くが、直線的で縁金に巻きつけられている。縁金最大長8.4cm、最大幅4.5cm、厚さ0.85cm。1-bの刺金は縁金に巻きつけられた部分のみ残る。縁金最大長7.7cm、最大幅5.0cm、縁金の厚さ0.75cm。2つを合わせた重量66g。形態から鞍から下げたベルトに装着する鉸具の可能性がある。

2はグリット1から出土した鉄製のもので、刺金はない。形態から鞍金具の可能性がある。最大長5.65cm、最大幅4.8cm、厚さ0.9cm。重量21g。

(6) 鎖(挿図17、図版32)

3はグリット1から出土した鉄製素環鏡板付鎖である。梢円形の鉸具立闇が付く。両方の引手の先端を欠くが、一体型でくの字に曲がる引手壺が共伴している。壺は二連壺で、引手は壺環に連結する。壺により付着していたため、復元図化している。復元による寸法は、鏡板(図右)本体最大径6.6cm、立闇を含めた長さ8.2cm、鏡板(図左)本体最大径7.0cm、立闇を含めた長さ8.0cm。二連壺最大長16.2cm。引手最大残存長9.0cm。

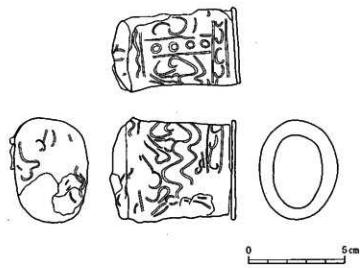
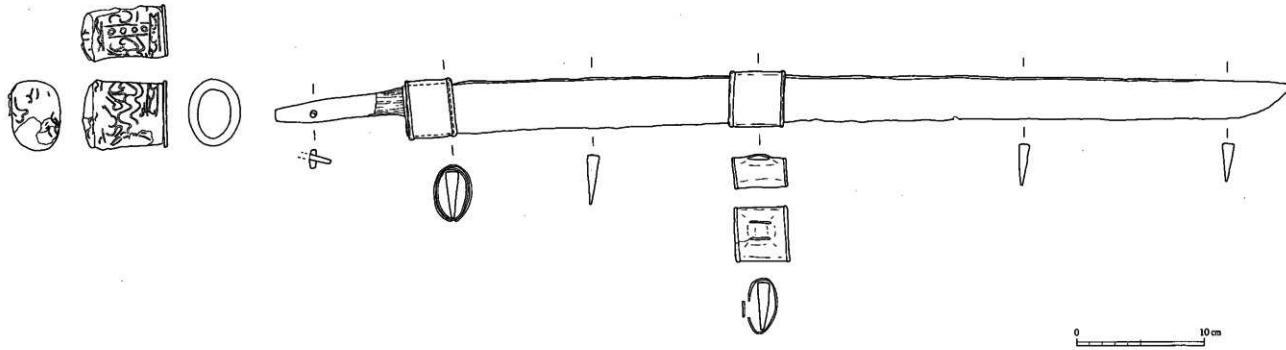
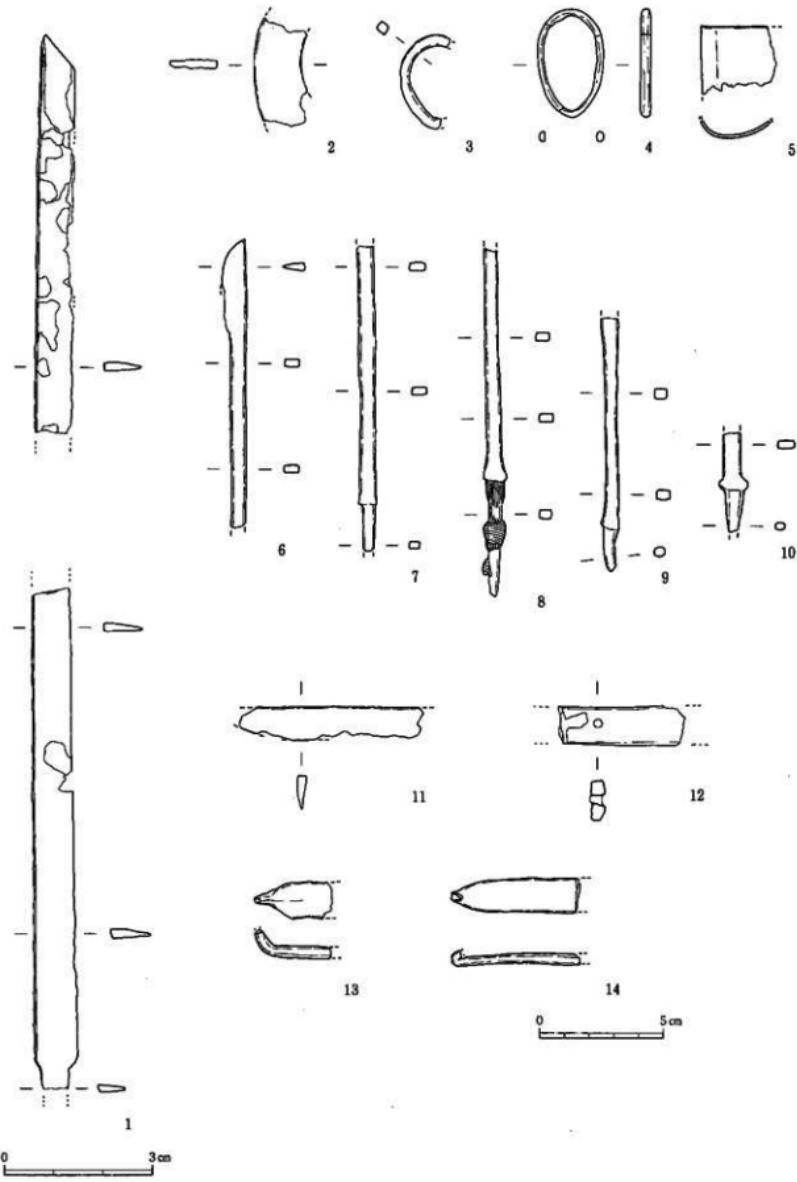
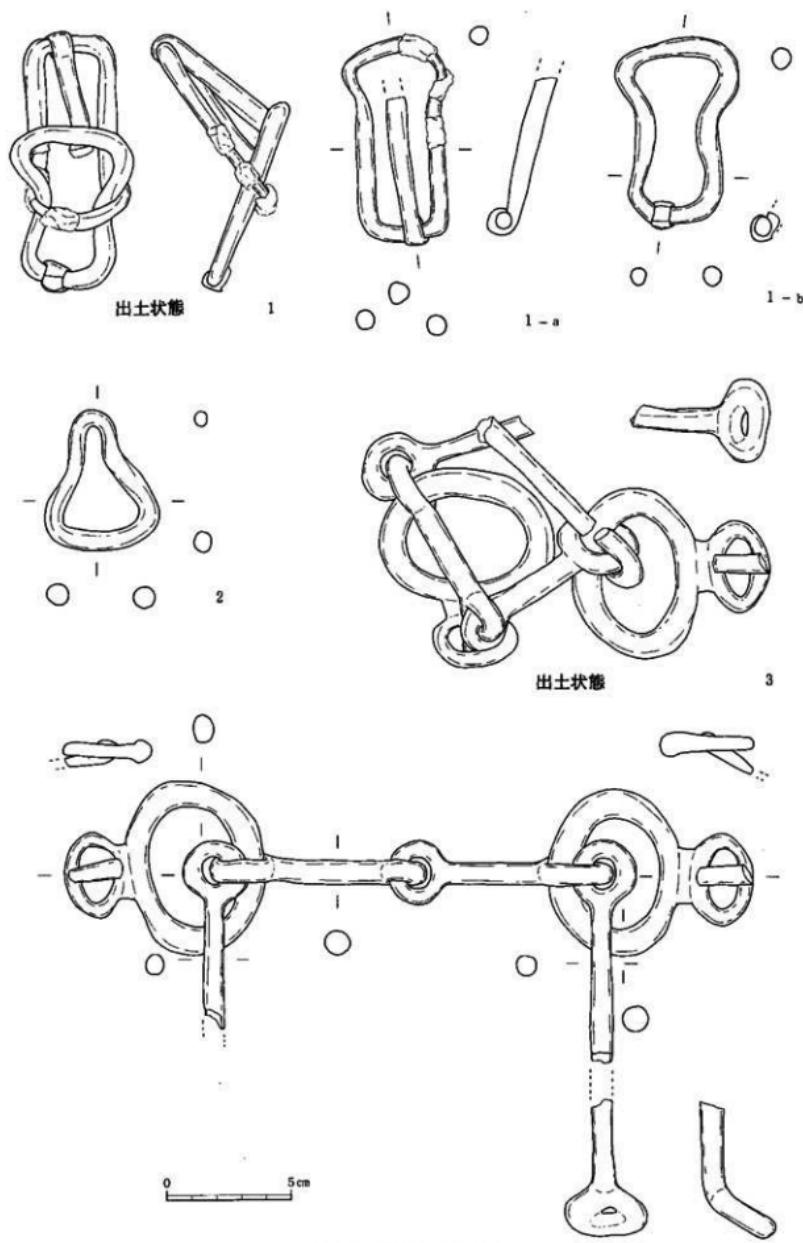


插图15 玄室出土装饰付大刀



插図16 玄室・狭道部出土 直刀・刀装具・鐵鎌・刀子ほか金属製品

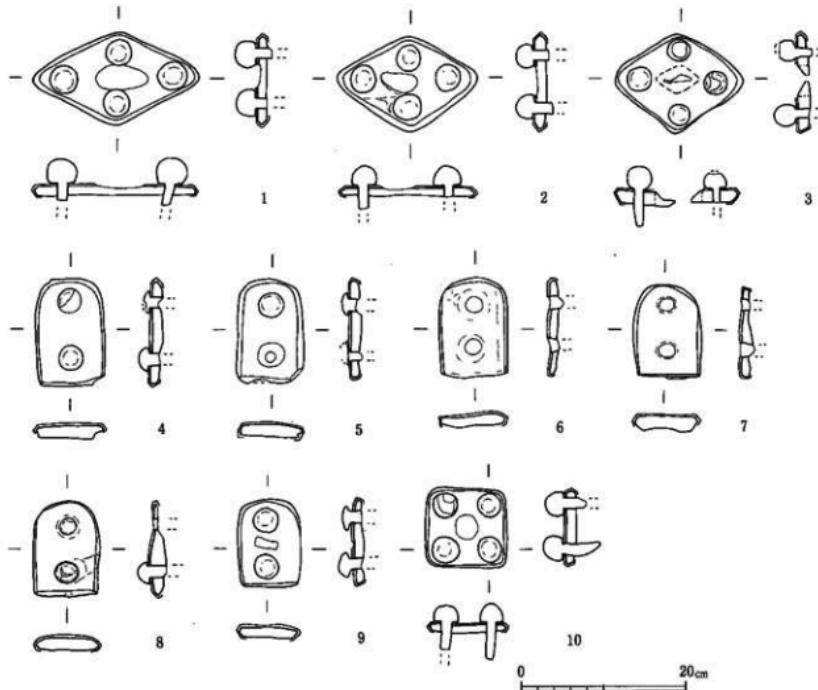


插図17 玄室出土鉤具・鎖

(7) 留金具 (挿図18、図版32)

鉢の付いた留金具は、金属製品の集中する北西隅から出土している。3種類の形態があるが、いずれも原位置を留めておらず、組合せは不明である。

図版No	種類	形態	出土位置	寸法(cm)			重さ(g)	材質	備考
				長さ(縦)	幅(横)	厚さ			
16-1	留金具	菱形	グリット3	2.7	5.1	0.3	15	鉄地金網張	面取・中心にスカシがある可能性・紙4
-2	留金具	菱形	グリット3	2.8	4.2	0.3	13	鉄地金網張	面取・中心にスカシがある可能性・紙4
-3	留金具	菱形	グリット1	2.9	3.9	0.45	11	鉄地金網張	面取・中心にスカシがある可能性・紙4
-4	留金具	爪形	グリット3	3.2	2.1	0.7	4	鉄地金網張	面取・紙2(金網強)
-5	留金具	爪形	グリット1	3.1	2.1	0.6	5	鉄地金網張	面取・紙2(金網強か)
-6	留金具	爪形	グリット1	3.0	2.1	0.5	5	鉄地金網張	面取・紙2
-7	留金具	爪形	グリット1	2.8	2.05	0.5	4	—	面取・紙2
-8	留金具	爪形	グリット1	2.8	2.0	0.9	5	鉄地金網張	面取・紙2
-9	留金具	爪形	グリット1	2.6	1.9	0.8	4	鉄地金網張	面取・紙2(金網強)
-10	留金具	方形	グリット1	2.3	2.5	0.3	8	鉄地金網張	面取・紙4(金網強)



挿図18 玄室出土留金具

2. 装身具

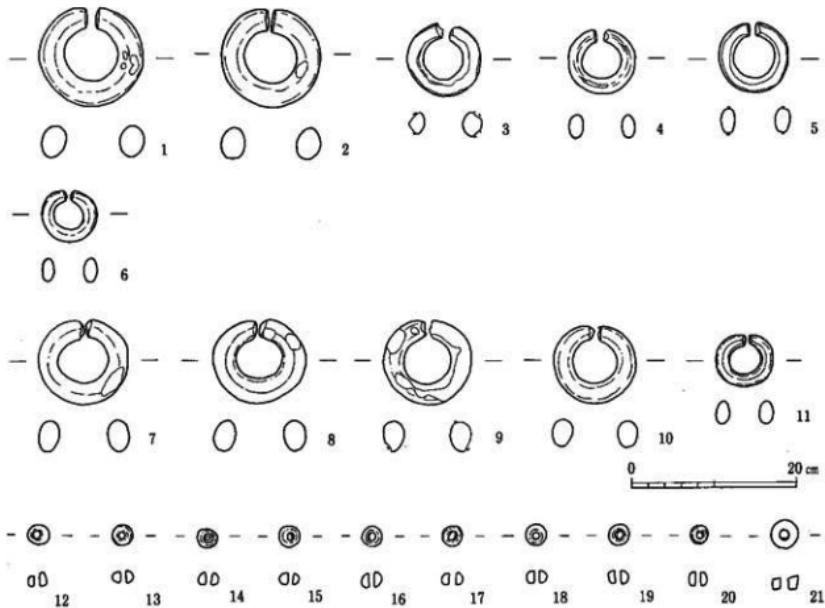
(1) 金環・銀環・玉類 (挿図19、巻頭図版6)

金環6点、銀環5点が出土しているが、石室全体に散在している。寸法等から対になるとみられるのは1と2、7と8である。

玉類は、いずれも覆土を築いた際に確認したものである。ガラス小玉9点と白玉1点である。

図版No.	種類	出土位置	寸法(cm)			重さ(g)	備考
			長さ(幅)	幅(横)	厚さ		
19-1	金環	グリット5	2.9	3.1	0.9	7	
-2	金環	グリット5	2.9	3.0	0.95	7	
-3	金環	グリット2	2.1	2.2	0.7	7	
-4	金環	グリット7	1.9	2.0	0.7	7	
-5	金環	グリット7	2.0	2.1	0.7	10	4と色調は類似するが対ではない
-6	金環	グリット10	1.5	1.7	0.7	5	
-7	銀環	グリット8	2.5	2.7	0.9	16	1対
-8	銀環	グリット1	2.5	2.85	0.9	16	
-9	銀環	グリット10	2.5	2.7	0.9	16	
-10	銀環	グリット4	2.3	2.5	0.8	12	
-11	銀環	グリット4	1.6	1.75	0.7	6	

図版No.	種類	出土位置	寸法(cm)			色調	備考
			長さ(幅)	幅(横)	厚さ		
19-12	ガラス小玉	グリット2	4.0	3.0	1.0	ジュエブルー	
-13	ガラス小玉	グリット2	4.0	2.5	1.0	ジュエブルー	
-14	ガラス小玉	グリット2	4.0	2.5	1.0	ウェッジウッドブルー	
-15	ガラス小玉	グリット2	4.0	2.5	1.0	ウェッジウッドブルー	
-16	ガラス小玉	グリット2	4.0	3.0	1.0	ジュエブルー	
-17	ガラス小玉	グリット5	4.0	2.5	1.0	ターコイズブルー	
-18	ガラス小玉	グリット7	4.0	2.5	1.0	ジュエブルー	
-19	ガラス小玉	グリット7	4.0	2.5	1.0	ジュエブルー	
-20	ガラス小玉	グリット7	4.0	2.5	1.0	新納戸	
-21	白玉	グリット7	5.5	2.5	1.5	老竹色	片側穿孔



挿図19 玄室出土金環・銀環・玉類

3. 土器器・須恵器

(1) 玄室出土土器器・須恵器 (挿図20・21、巻頭図版6・図版33・34)

須恵器については、玄室の北東隅（グリット2）の一群（挿図20-5～12）、奥壁中央（グリット2）から出土した有蓋高杯（挿図20-4）、東側羨道部袖石の脇（グリット10）から出土したフラスコ形瓶（挿図20-18）などが比較的原位置を保っているのか、残存状態の良いものである。

玄室の北東隅出土の一組はいずれも蓋であるが、杯の蓋もしくはやや小型の9～12は長頸壺等の蓋とみられる。蓋のみであることから、埋納当初のものではなく、追葬過程の中で再配置された可能性もある。挿図20-1～3は有蓋高杯の周辺、13～17は玄室中央部、挿図21-1～4は攪乱周辺から出土しているが、いずれもまとまりではなく、破片が散在しているものがある。

器名	器種	器形	寸 法(cm)		手 紹		縫合	焼成	色 質			残存	
			口径	脚径	底径	高さ	外 面	内 面	外面	内面	断面		
20-1 土器器		高杯(杯)	16.8	-	-	-	ナテ・腹へ1.5cm	ナテ・腹へ1.5cm	縫1・白石粒・蓋付	良	純い檜	4/5	
20-2 土器器		高杯(杯)	(16.0)	-	-	-	ナテ・腹へ1.5cm	ナテ・腹へ1.5cm	縫1・白石粒・蓋付	中相	純い檜	1/2弱	
20-3 土器器		高杯(脚)	-	-	(16.0)	-	ヨコナナデ	ヨコナナデ	縫1・白石粒・蓋付	良	浅黄檜	黄檜	
20-4 須恵器	2段3万スカラ	有蓋高杯	12.6	-	-	13.6	19.0	ロクロ・ヘラケリ	ロクロ	縫1・白石粒	良	灰白	灰白
20-5 須恵器	蓋杯(蓋)	11.8	-	-	-	2.6	ロクロ・ヘラ	ロクロ	縫1～2・白石粒	良	灰	灰	-
20-6 須恵器	蓋杯(蓋)	13.0	-	-	-	3.1	ロクロ	ロクロ	縫1～2・白石粒	良	灰(自然檜)	灰白	完存
20-7 須恵器	蓋杯(蓋)	12.4	-	-	3.2	ロクロ	ロクロ	縫1・以下白石粒	良	灰(自然檜)	灰白	完存	
20-8 須恵器	蓋杯(蓋)	9.0	-	-	1.8	ロクロ・ヘラ	ロクロ	縫1～2・白石粒	良	灰白	灰白	-	
20-9 須恵器	蓋	10.6	-	-	3.1	ロクロ・ヘラ	ロクロ	縫3・白石粒	良	#1-1/2灰	灰	-	
20-10 須恵器	蓋	10.5	-	-	3.1	ロクロ・ヘラ	ロクロ・ナデ	細粒多し	良	灰白	灰白	完存	
20-11 須恵器	蓋	11.2	-	-	2.4	ロクロ	ロクロ	白石粒多し	良	灰白	青灰	焼灰	
20-12 須恵器	蓋	11.8	-	-	3.1	ロクロ・ヘラケリ	ロクロ・ナデ	縫1～2・白石粒	良	青灰	青灰	完存	
20-13 土器器		高杯(脚)	-	-	13.2	-	ナテ・腹へ1.5cm	ハケ	白砂粒・雷母	良	檜	明檜	2/3
20-14 須恵器	蓋杯(蓋)	11.2	-	-	5.1	ロクロ・ヘラケリ	ロクロ	縫1～3・白石粒	中相	灰白	灰	3/4	
20-15 須恵器	蓋杯(蓋)	12.2	-	-	3.2	ロクロ・ヘラケリ	ロクロ	縫1～3・白石粒	良	灰	灰	完存	
20-16 須恵器	蓋杯(蓋)	11.1	-	-	4.7	3.2 ロクロ・ヘラケリ	ロクロ	白砂粒	良	暗青灰	暗青灰	完存	
20-17 須恵器	蓋杯(杯)	11.5	-	-	3.2	ロクロ・ヘラケリ	ロクロ	縫1・以下白石粒	良	灰(自然檜)	晦灰	焼灰	
20-18 須恵器	フラスコ形瓶	11.6	15.9	-	15.0	-	24.4	ロクロ・ハケ	ロクロ	縫1・以下白石粒	良	灰白～暗	灰～黒灰

(2) 羨道部出土土器器・須恵器 (挿図21、図版34・35)

羨道部閉塞石の上（グリット10・12）から出土した一群（8～15）はいずれも蓋杯であるが、蓋と身が必ずしもセッティングになるわけではなく、やはり追葬時の再配置も考えられる。5～7も閉塞石上から出土しているが、原位置にない。また、閉塞石の間（グリット13）からは甕（挿図21-16）が出土し、羨道部の外側からは追葬の際に掻き出されたとみられる杯類（挿図21-17～19）がある。

器名	器種	器形	寸 法(cm)		手 紹		縫合	焼成	色 質			残存	
			口径	脚径	底径	高さ	外 面	内 面	外面	内面	断面		
21-1 土器器		高杯	13.1	-	12.0	12.9	ナテ・腹へ1.5cm	ナテ・腹へ1.5cm	縫1・白石粒・蓋付	良	檜	檜(内面) 檜	ほぼ完存
-2 須恵器	高杯(杯)	11.0	-	-	-	ロクロ	ロクロ	縫5～1・白石粒	良	灰地	灰(自然檜)	灰	
-3 須恵器	2段3万スカラ	有蓋高杯	11.6	-	9.8	11.9	ロクロ	ロクロ	白石粒	良	灰(自然檜)	灰(自然檜)	ほぼ完存
-4 須恵器	蓋	10.4	-	-	-	ロクロ	ロクロ	白石粒	良	灰地	灰(自然檜)	灰(自然檜)	
-5 須恵器	蓋杯(蓋)	14.0	-	-	3.4	ロクロ・ヘラ	ロクロ	縫1～2・白石粒	良	灰	灰	3/4弱	
-6 須恵器	蓋杯(蓋)	14.2	-	-	3.0	ロクロ・ヘラ	ロクロ	縫1～4・白石粒	良	灰	灰	ほぼ完存	
-7 須恵器	蓋杯(蓋)	11.7	-	-	2.8	ロクロ・ヘラ	ロクロ	縫1～2・白石粒	良	灰	灰	ほぼ完存	
-8 須恵器	蓋杯(蓋)	14.6	-	-	4.1	ロクロ・ヘラ	ロクロ	縫1～3・白石粒	良	灰	灰	完存	
-9 須恵器	蓋杯(蓋)	15.6	-	-	3.8	ロクロ・ヘラ	ロクロ	細白石粒	良	赤灰～褐灰	灰	-	
-10 須恵器	蓋杯(蓋)	14.6	-	-	3.4	ロクロ・ヘラ	ロクロ	細白石粒	良	灰	灰	完存	
-11 須恵器	蓋杯(蓋)	15.4	-	-	3.2	ロクロ・ヘラ	ロクロ	砂粒	良	灰(自然) 暗	灰黄檜	完存	
-12 須恵器	蓋杯(杯)	14.5	-	-	9.6	5.6 ロクロ・底部へ3cm	ロクロ・ナデ	砂粒	良	灰	灰	ほぼ完存	
-13 須恵器	蓋杯(杯)	14.2	-	-	10.0	5.5 ロクロ・底部へ3cm	ロクロ	砂粒	良	灰～黒地	褐地	完存	
-14 須恵器	蓋杯(杯)	14.1	-	-	9.8	5.8 ロクロ・底部へ3cm	ロクロ	砂粒	良	灰～黒地	灰	完存	
-15 須恵器	蓋杯(杯)	13.6	-	-	9.3	5.1 ロクロ・底部へ3cm	ロクロ	細白石粒	良	灰	灰	完存	
-16 須恵器	甕	(10.6)	8.0	5.6 (14.0)	ロクロ	ロクロ	細白石粒	良	灰(自然) 暗	褐灰～灰黄檜	灰黄檜	2/3	
-17 須恵器	蓋杯(蓋)	10.8	-	-	4.1	ロクロ・ヘラ	ロクロ	細白石粒	良	灰	灰	3/4	
-18 須恵器	蓋杯(杯)	11.8	-	-	3.3	ロクロ・底部へ3cm	ロクロ	縫1～以下白石粒	良	灰	灰	ほぼ完存	
-19 須恵器	蓋杯(杯)	(12.3)	-	(9.2)	5.8 ロクロ・底部へ3cm	ロクロ	縫2～3・白石粒	良	灰～黒地	灰	2/3		

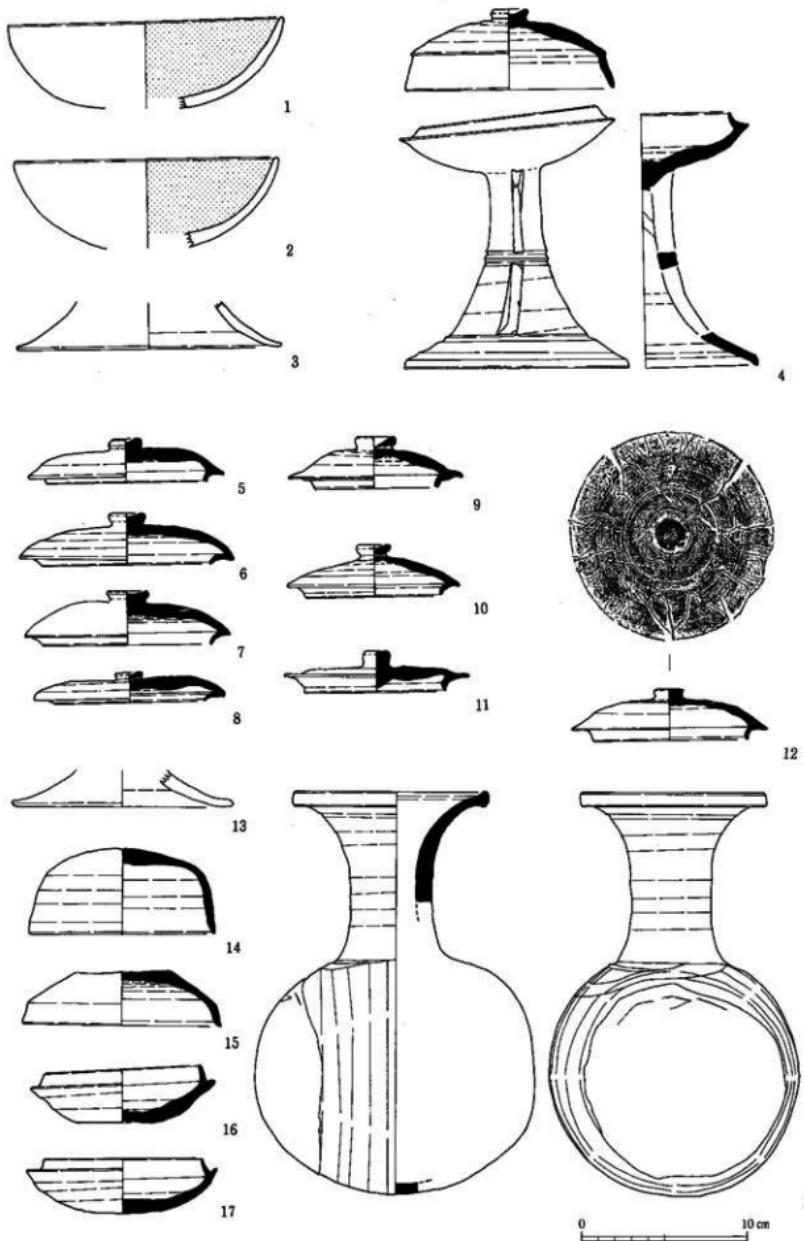
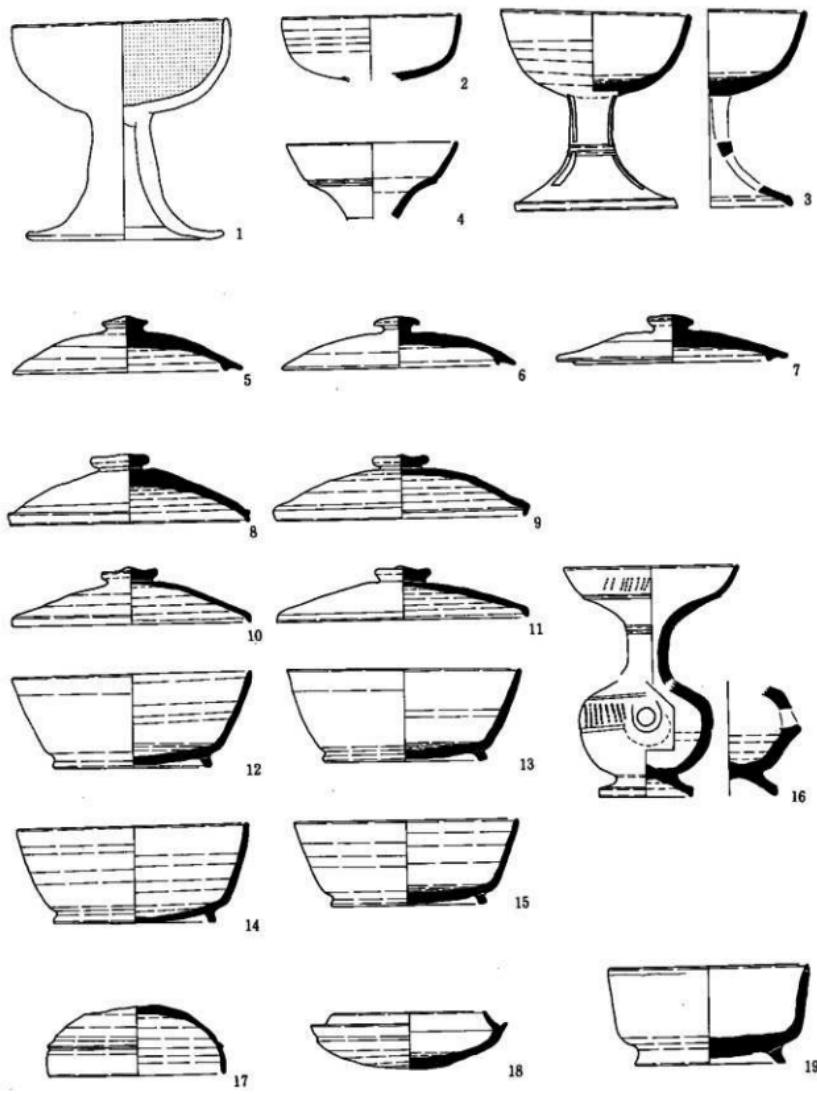


插圖20 玄室出土土師器・須惠器



0 10 cm

插図21 玄室・羨道部出土土師器・須恵器

4. その他

(1) 雲母

直径1cm強の白雲母がグリット3(Na1008)から出土した。出土時はもっと大きかったと記憶しているが、取り上げ等作業の際、剥離・折断してしまった。また、篩いでも、グリット1~4から出土している。垂直分布は、底部から0~30cmと幅はあるが、鉄鎌や馬具等の垂直分布も同様である。石室底部の石敷下の土からも籠いで確認されている。

自然界に存在する白雲母は、調査地点近辺では砂粒程度の大きさが普通である。これほど大きな欠片はまず存在しない。これほど大きなものは、ベグマタイトと呼ばれる、脈状に存在する巨晶花崗岩より産するらしい。ベグマタイトが、既に失われた側壁や天井石に存在したかは不明であるが、調査時に確認された石室部材中には認められなかった。石室の一部にベグマタイトが存在し、それより剥落した可能性もあるが、出土位置も他の遺物が濃密に分布するグリットと重複することから、人為的な何らかの行為により石室内部に搬入されたとみられる。図化はしていない。

(2) 不明鉄製品(押図16)

石室内からは棺材は確認されていない。また、釘については、鉄鎌とした棒状の破片の中に存在する可能性もあるが、特定できなかった。

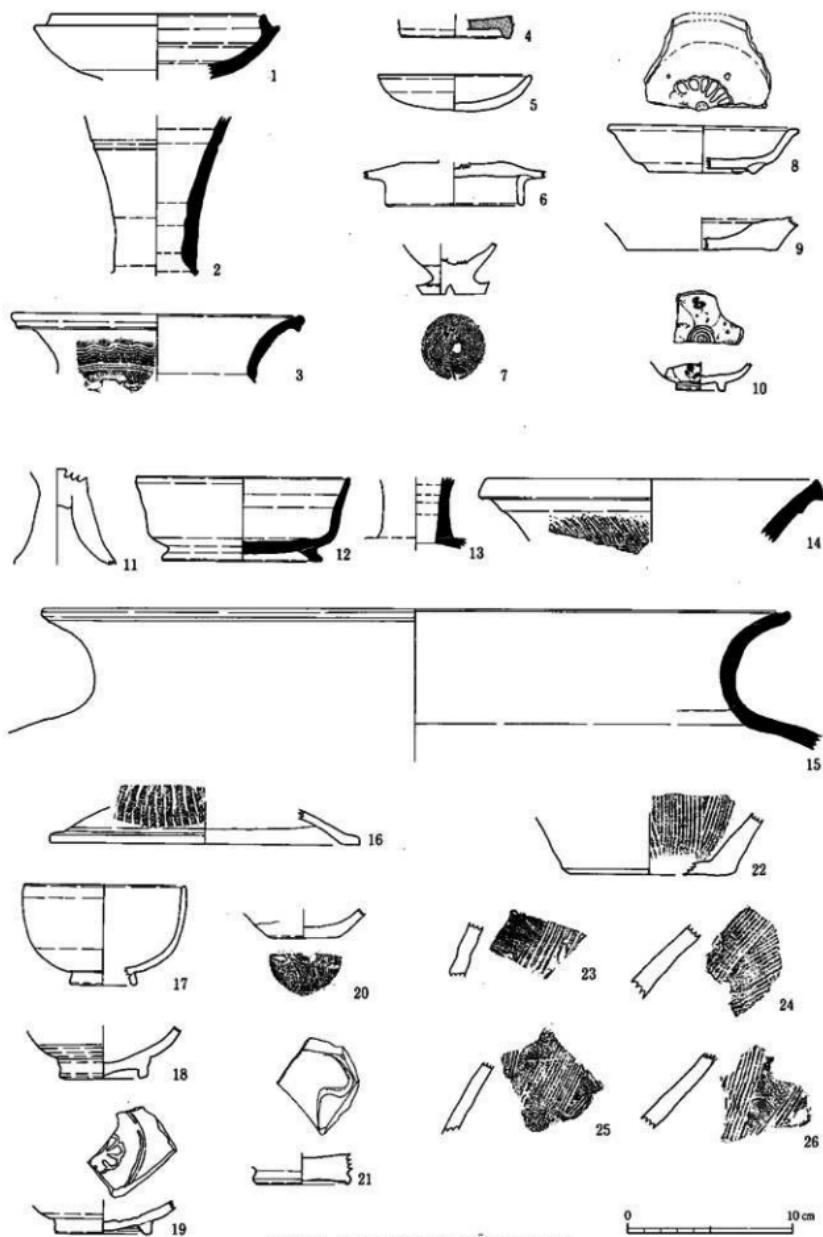
13はグリット1、14はグリット2から出土した鉄製品である。半分以上欠損している。いずれも幅1.4cm、厚さ0.5cmで端部の幅が狭くなり、先端が折り曲げられている。木質等はない。

第3節 墳丘及び周辺出土遺物 (挿図22・23、図版35)

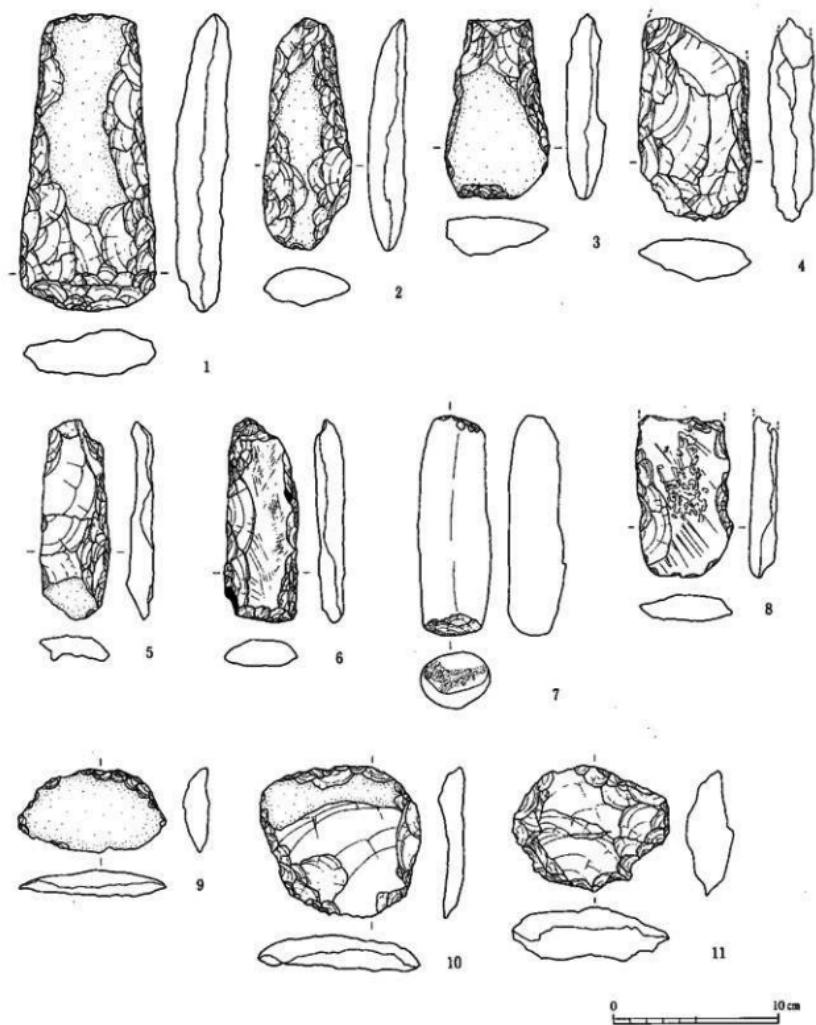
調査区および石室外から出土した遺物は、土師器・須恵器・陶磁器類があるが、いずれも原位置を留めておらず、混入品と考えられるが、陶磁器類は本古墳が破壊・削平された時期と関わるとみられる。1・6～8・10は墳丘東西トレンチ、2・3は北西側調査区、4・5・9は南東側調査区から出土した。15～26は、石室外（墳丘）からの出土である。墳丘周辺からは土師器・須恵器が出土するが多くはなく、追葬時に挿き出された可能性がある。それ以外は陶磁器類である。古墳破壊の時期に関わる可能性が考えられるものとして、羨道部の外側から出土したものと墳丘東西トレンチで確認された2段目側壁の裏側の搅乱（挿図7 E-E'参照）からの出土遺物がある。搅乱内には小砾のほか、陶磁器（6・7・10）が混入している。当初、側壁の裏込めと考えたが、トレンチで確認したところ、後世の手が入っていることが確認できた。側壁そのものはほとんど動いてはいないが、裏込め石は抜き取られている。搅乱は上から40～60cmの深さに及んでいる。おそらくこの時点では古墳の上部はかなり削平されていた可能性がある。このほか、墳丘からは石器が出土している。

調査区	器種	器形	寸法(cm)		手法	粘土	焼成	色調			残存	
			口径	脚径				外面	内面	断面		
22-1	須恵器	壺环(坏)	(15.0)	-	-	(3.8)	ロクロ	ロクロ	様1mm以下白石粒	良 暗赤灰 灰褐色	灰褐色	1/8
-2	須恵器	壺環(鉄輪)	-	-	-	-	ロクロ	ロクロ	白色砂粒・織密	良 灰白(自然釉)	灰白	圓化形
-3	須恵器	壺(直)	(17.6)	-	-	-	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 灰	灰黄	8/8
-4	灰陶陶器	壺(直)	-	-	(6.6)	-	ロクロ	ロクロ	様1mm白石粒	良 灰白 砂粒・雲母	灰白	1/2
-5	土師器	かわらけ	9.4	-	-	2.1	ナデ	ナデ	良 灰	純い緑	純い緑	1/2
-6	陶器	壺	-	-	-	2.5+	ロクロ	ロクロ	良 黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/2弱
-7	陶器	壺	-	-	3.9	-	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 灰 灰褐色(鉄輪)	灰褐色	圓化形
-8	陶器	壺	(11.2)	-	(6.6)	2.7	ロクロ	ロクロ	良 白色物	白色物	黄褐色	1/3
-9	陶器	鉢	-	-	(9.2)	-	ロクロ	ロクロ	雲母	良 灰黄	灰黄	1/4
-10	須恵器	壺	-	-	(3.0)	-	ロクロ	ロクロ	織密	良 白墨・雲母	白色・青白	1/2弱
-11	土師器	高杯(脚)	-	-	-	-	ナデ	ヘラ	物粒・雲母	良 内面	純い緑	純い緑
-12	須恵器	壺环(坏)	(13.0)	-	9.6	(5.0)	ロクロ・直筒ヘラ	ロクロ	様1～2mm白石粒	良 灰	褐色	1/5
-13	須恵器	長颈壺	-	-	-	-	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 灰(自然釉)	灰(自然釉)	1/2強
-14	須恵器	壺	(20.2)	-	-	-	ロクロ	ロクロ	様1mm白石粒	良 灰	灰	1/8
-15	須恵器	壺	(45.4)	-	-	-	ロクロ・ナデ	ロクロ・ナデ	様1mm以下白石粒	良 (自然釉)	灰黄褐色	1/8
-16	陶器	壺	(18.6)	-	-	-	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 灰褐色(鉄輪)	灰褐色(鉄輪)	灰褐色
-17	陶器	壺	(9.7)	-	(4.0)	6.1	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 鐵褐色	鐵褐色	1/4
-18	陶器	壺	-	-	5.3	-	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 灰褐色(鉄輪)	鐵輪	3/4
-19	陶器	壺	-	-	(5.8)	-	ロクロ	ロクロ	良 灰	淡黄褐色	淡黄褐色	1/3強
-20	陶器	壺	-	-	(4.4)	-	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 灰	淡黄褐色	1/2
-21	青磁	壺	-	-	(5.5)	-	ロクロ	織密	良 青墨	青墨	白	1/3
-22	陶器	擂鉢	-	-	(9.6)	-	ロクロ	ロクロ	様1mm白石粒	良 (鐵輪)	純い青褐色 (鐵輪)	純い青褐色 (鐵輪)
-23	陶器	擂鉢	-	-	-	-	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 純い青褐色 (鐵輪)	純い青褐色 (鐵輪)	破片
-24	陶器	擂鉢	-	-	-	-	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 純い青褐色 (鐵輪)	純い青褐色 (鐵輪)	破片
-25	陶器	擂鉢	-	-	-	-	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 純い青褐色 (鐵輪)	純い青褐色 (鐵輪)	破片
-26	陶器	擂鉢	-	-	-	-	ロクロ	ロクロ	砂粒	良 灰褐色(鉄輪)	灰褐色(鉄輪)	破片

調査区	種類	寸法(cm)			石質	残存
		長さ	幅	厚さ		
23-1	打製石斧	17.6	8.2	3.0	硬砂岩	完存
-2	打製石斧	13.8	5.4	2.3	硬砂岩	完存
-3	打製石斧	10.7	6.3	2.3	硬砂岩	完存
-4	打製石斧	12.0+	6.8	2.8	緑色岩	上部欠損
-5	打製石斧	11.8	5.3	1.7	緑色岩	完存
-6	打製石斧	12.1	4.5	1.9	緑色岩	完存
-7	敲打器	13.1	4.5	3.5	硬砂岩	欠損あり
-8	砥石	9.6+	5.9	1.7	粘板岩	完存
-9	横刃型石刀	5.0	9.0	1.6	硬砂岩	完存
-10	横刃型石刀	8.9	9.8	2.2	硬砂岩	完存
-11	横刃型石刀	7.4	9.5	3.2	硬砂岩	完存(打製石斧の軸用)



插図22 調査区および石室外出土遺物



插図23 墳丘出土石器

第4節 古墳の築造時期と追葬（挿図13～22）

個々の遺物の時期については十分な検討ができていないが、これまでに述べてきた遺物の出土状況を基に、築造時期と追葬等の時期についておおよその見通しを述べることとする。

① 6世紀末～7世紀初頭

最初の埋葬行為に関わると考えられるものとして、玄室北西隅（グリット1・3・5）から出土した金属製品がある。時期決定の要因として装飾付大刀（挿図15）・鉢具（挿図17-1・2）・轡（同図-3）が挙げられる。装飾付大刀は、形態的に典型的な円頭柄頭とはいせず、象嵌文様も退化形態とみることもできるが、柄頭に懸通孔がないこと、鞘に金属板を用いていないとみられること、そして佩用が継続の可能性があることなどから、6世紀末ないし7世紀初頭前後の様相を示していると考えられる。素環鏡板付轡は鉢具立聞が付くものであり、6世紀末～7世紀初頭の年代が与えられる。環状鉢具は6世紀末頃、軽金具とみられる方は刺金を伴わないタイプであることから6世紀末から7世紀初頭の年代が考えられる。また、奥壁の中央から出土した須恵器（長脚2段スカシ有蓋高环）や土師器（高环）も同時期と考えられる。こうしたことから、最初の埋葬行為は6世紀末から7世紀初頭で、副葬品としては、上記のもののはかに、留金具・銀環・鉄鎌等の金属製品を中心に須恵器類を伴うものと考えられる。このなかで、金環・銀環・鉄鎌は石室内のほぼ全体に散在しており、原位置を留めているものはないと思われ、これらのすべてが最初の埋葬行為に伴うかは現状では判断できない。また、北東隅（グリット2）の直刀については時期を特定し難いが、最初の副葬品として埋納された可能性がある。これらの金属製品は当初置かれた位置より、後の追葬の段階で石室の端に寄せられたことが考えられる。

また、羨道部の外側、崩れた閉塞石の下から須恵器の环蓋・环身（挿図21-17・18）が出土している。これらは後の追葬の際に石室外に掻き出されたものと考えられる。6世紀代に入るとみられるが、最初の埋葬行為に伴い埋納された可能性がある。また、玄室中央（グリット6・7）から出土した須恵器の环身・环蓋（挿図20-14～17）も6世紀代に入るとみられるが、いずれも原位置を留めていない。

以上の点から、本古墳の築造時期は6世紀末頃と考えられる。

② 7世紀代

玄室内北東隅（グリット2）から出土した須恵器の蓋8点（挿図20-5～12）がある。いずれも蓋であり、出土状況から2群に分かれるが、一括して置かれたものと考えられる。蓋は凹もしくは凸形の高いつまみを有するもので、やや小型の9～12が壺等の蓋になる可能性があることから、当方でも類例が少なく、個々の時期の特定がし難いが、7世紀後半頃とみられる。さらに、蓋と対になる环・壺類は石室内外ともに出土しておらず、あえて蓋のみを埋納したのか、後の追葬の際に二次的に蓋のみが配されたのかは判断できない。

玄室の中央から羨道部寄りの部分は炭化物・焼土・骨が出土しており、この部分では遺物も全体的に散在している状況で、追葬行為によりかなり移動を余儀なくされているとみられ、追葬行為の過程を追うことは難しい。このほか、グリット10から出土した須恵器の長脚2段スカシの無蓋高环（挿図21-2・3）や須恵器のフラスコ形瓶（挿図20-18）も7世紀代の時期が与えられる。無蓋高环は攪乱内に破片

が混入しており、フ拉斯コ形瓶はほぼ完存しているが、玄室南東隅に側壁に寄りかかるような状態で出土しており、本来置かれた位置ではない可能性がある。

羨道部のグリット9・11から出土した須恵器の壺蓋（挿図21-5～7）は、閉塞石の上から出土したものである。やや扁平化した宝珠つまみをもち、内面にかえりを有する。これらと対になる壺身は出土しておらず、おそらく原位置を留めていないと考えられる。7世紀後半～末頃とみられるが、本来玄室内にあったものが掻き出されたのか、意図的に閉塞石上に置いたものが移動したのかは不明である。また、閉塞石上部の石の間（グリット13）からは須恵器の壺（挿図21-16）が出土しており、おそらく玄室内のものが後の追葬の際に掻き出され、閉塞石の移動の際に混入したものと考えられる。

③ 8世紀後半

グリット10・12の閉塞石の上から須恵器の壺蓋・壺身（挿図21-8～15）が出土している。転落した閉塞石により破損しているが、2列に配置された状況はほぼ原位置を留めていると考えられる。蓋は扁平化した宝珠つまみをもち、内面にかえりはない。身は高台を有する。8世紀後半～末のものと考えられ、遺物から判断できるものとしては、本古墳への埋葬行為の最終段階のものになる。

ただし、この閉塞石への須恵器の配置が遺骸の埋葬に直接伴って置かれたものか、あるいは羨道部という位置から石室の閉塞という行為に対して置かれた可能性も考えられる。

以上のことから、本古墳は6世紀末に築造がなされ、最初の埋葬行為には金属製品を中心とした副葬品が伴うと考えられる。これには銀象嵌を施した柄頭をもつ直刀が含まれるなど、古墳の被葬者の性格を推定する上で特筆すべきものである。次に遺物からは7世紀代に2回程度の追葬が行なわれた可能性があるが、いずれも遺物の一括性を欠き、追葬の過程を十分に把握しえなかった。その中で、グリット2から出土した須恵器の蓋の配置状況は興味深い。蓋のみを置くという行為が意図的なものであるにせよ、これが、いわゆる副葬品としての埋納なのか、あるいは後に二次的に配置されたものなのか、両者の可能性が考えられる。最終段階としては、グリット10・12の閉塞石上から出土した須恵器の壺蓋があり、8世紀後半の時期が考えられる。これについても副葬品としての配置なのか、別の意味を持つことも考えられ、一概に追葬といつても、横穴式石室内への埋葬行為には、当初の副葬品としての配置だけではなく、後の移動や意図的な二次的配置、いわゆる副葬品とは意味を異にする祭祀行為的な遺物の配置も存在することが考えられ、複雑な状況がある。

このほかに、玄室内からは炭化物・焼土・骨が出土している。骨は焼骨であり、人か否かの検討をしていないため、いわゆる火葬墓としての利用があったかの確定はできない。ただ、上述した8世紀以降の遺物は石室内からは出土しておらず、炭化物等に直接伴う遺物もなく、時期の特定はできない。これは玄室羨道部寄りの搅乱についても同様である。これらからは、本来石室の奥の方にあったと考えられる遺物も混入しており、時期的には比較的新しい段階といえる。

古墳がいつ破壊されたかについては、遺物が少ないとから明確にはできないが、周溝覆土上層から出土した灰釉陶器等から平安時代の終わりから中世には周溝はほとんど埋没していたとみられ、西側壁外側の搅乱から出土した陶磁器類から中世の終りから近世に大きく削平された可能性がある。

本報告書では、十分な検討ができなかったが、こうした埋葬行為の具体的な復元については、他との比較検討から、今後の課題として考えていただきたい。

第VI章 まとめ

本文中で、墳丘および横穴式石室の構築工程、追葬の状況については概要を述べたので、最後に上溝11号古墳をめぐる周囲の状況を概観しまとめとしたい。

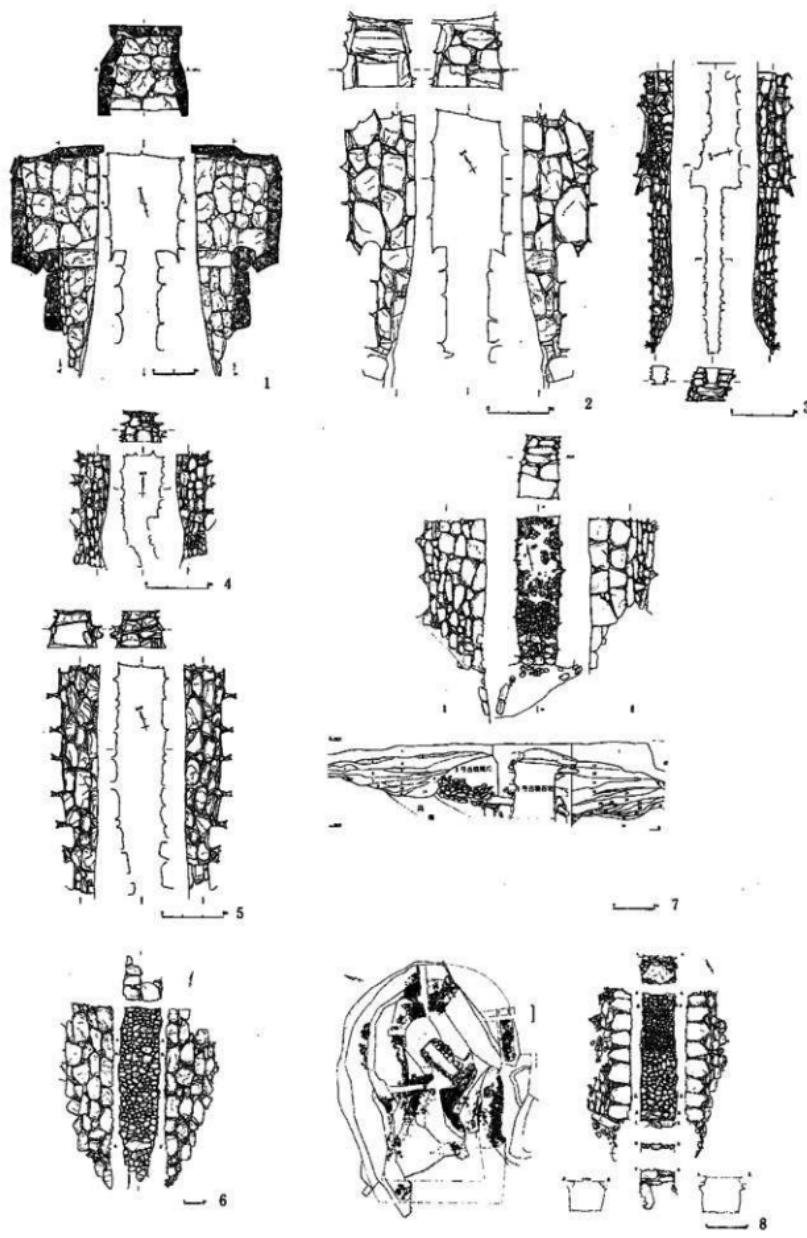
第1節 横穴式石室について（挿図24）

上溝11号古墳の位置付けを考える上で、ポイントとなるのは横穴式石室である。当地方の横穴式石室については、かつて白石太一郎氏が論文「伊那谷の横穴式石室」の中で、伊那谷における初現期横穴式石室の多様性を指摘し、「入手しうる石材のちがいによるものなど伊那谷で生じた部分があることは予想できる。」としながらも、「畿内政権の東国支配の特異なメカニズムと関連させてはじめて説明が可能になるのである。この地の在地集団は、多くの場合それが従属関係にある畿内豪族、ないしは同じくその支配下で同族関係にあった隣接地域の豪族の指導、ないし技術援助をうけて横穴式石室を造営したのであろう。」と述べており、石室形態の違いから中央と地方との関係を論じている点で極めて示唆に富むものである。

その後、石室形態の系譜をどう考えるかについては、一部の石室については新たな知見も論じられているものの、その多様性を地域内でのあり方を加味したかたちでは十分に解釈されているとは言い難い。同じ地域、同じ古墳群として捉えられる中にも、複数の形態の石室が存在することから、個々の石室の系譜や導入経路、導入時期とその後の変遷を詳細に検討する必要がある。しかし、盗掘によりの検討を難しくしている部分もある。とはいって、近年横穴式石室の調査例も増加したことから、少し上溝11号古墳との比較をしてみたい。

上溝11号古墳は、15基ある上溝古墳群として捉えられているが、第Ⅲ章でも述べたように、地形的には上溝天神塚古墳・姫塚古墳・おかん塚古墳のある台地からは一段低い位置にあり、同じ古墳群として捉えるにしても、下段の4基の古墳は築造時期や被葬者の性格から一支群を成すことが考えられるが、11号古墳以外は詳細不明である。上溝天神塚古墳(5)・姫塚古墳(4)・おかん塚古墳(1)はいずれも横穴式石室を有する前方後円墳で、これらの平面形態は、左から無袖式、片袖式、両袖式である。上溝天神塚古墳とおかん塚古墳で調査が行なわれているものの、十分な報告・検討が成されていないが、墳丘の中段に開口する上溝天神塚古墳と姫塚古墳が6世紀前半で姫塚古墳がやや先行する。おかん塚古墳が6世紀後半とみられる。上溝天神塚古墳の無袖式タイプの石室は当地方で最も類例が多く、当地方の横穴式石室の中では初現期のものではないとみられるが、6世紀前半には導入され、当地方の古墳築造の最終段階まで埋葬施設として用いられた最も普遍的な石室形態である。

上溝11号古墳は、両袖式の横穴式石室である。これまで、市内で確認された両袖式の横穴式石室には、おかん塚古墳のほかに竜丘地区の馬背塚古墳前方部石室(2)、上郷地区的飯沼天神塚古墳(3)がある。おかん塚古墳と馬背塚古墳は形態も類似し、畿内型の巨石を用いた石室である。飯沼天神塚古墳は姫塚古墳と類似する小型の川原石積みの石室で、赤彩を施すなど共通項はあるものの、その平面形態や規模



挿図24 市内の横穴式石室 1. おかん塚古墳 2. 馬背塚古墳 3. 飯沼天神塚古墳 4. 振塚古墳 5. 上満天神塚古墳
 $(S=1/250)$ 6. ナギジリ1号古墳 7. 塚穴1号古墳 8. 北本城古墳(左墳丘 $S=1/600$)

は大きく異なる。これらと比較すると、上溝11号古墳は同古墳群内においてだけではなく、石材・規模・平面形態等でこれまでのものと異なる構造をしており、厳密にいうと類似するものはない。明らかに袖部を作り出すことを意図しており、袖部が立石ではない点では飯沼天神塚古墳や姫塚古墳に類似する。また、石室規模や石積み方法は異なるが、平面形態では馬背塚古墳の前方部石室に近い。無袖式と袖部に立石を立てない両袖式の折衷用とも考え難く、周辺との比較検討が必要である。

ちなみに、無袖式でも座光寺地区ナギジリ1号古墳(6)のように羨道部が玄室より幅が狭くなるもの、竜丘地区的御猿堂古墳では東側壁に若干内側に突出している部分があり、袖が形成されている可能性が指摘されている。上溝天神塚古墳でも石室内部の調査で同様の側壁の突出が確認されており、袖部の形態についてはさらに詳細な観察による検討が必要であり、築造時期による違い等も検討課題である。

もう一つ、石室の構造で特徴があるのが、石室前端部の列石としたものである。側壁との位置関係から、A - 羨道部西側壁に連続するもの、B - 側壁前端部を覆う形のものとの2形態が認められることを述べたが、Aに類似するものとして、上久堅地区的塚穴1号古墳(7)がある。この古墳の場合、石室の西側壁前端部に連続して積まれている。墳丘全体を調査しているわけではないので、この石積みが古墳の周囲を巡るものかを確認できていないが、墳頂部に同様のものが確認できなかったことから、葺石というより、墳裾部のみに構築された外護石積ではないかとしている。最大で高さが1mある。また、塚穴1号古墳は葺石とは別に石室前端部から外側に開く形で石が並べられており、前庭部を意識しているとしている。このほかに前庭部が確認できるものに座光寺地区の北本城古墳(8)がある。Bと類似するものは、平成14年度に発掘調査した大座2号古墳(未報告)でも認められる。しかし、両者の石室の構造は異なる。

開口している横穴式石室の場合、入口部分は破壊されている場合が多く、また墳丘を含めた石室調査も多くはないので、こうした石室開口部の状況が把握できた例は当方では少ない。いわゆる外護列石も含めて、こうした石室開口部の構造は、古墳の形態や築造工程とも関わるものであることから、今後、古墳前面の構造については注意したい。

第2節 上溝11号古墳の位置付け

上溝11号古墳は、上溝古墳群内でもおそらく時期的には新しい段階に築造された横穴式石室を有する円墳であると考えられる。前述のように、立地からみても前方後円墳を中心とする上段の群とは別に一支部を形成している可能性がある。上段の古墳との良好な比較資料が少ないと、上溝天神塚古墳との関係をみると、上溝天神塚古墳からは銀装の主頭柄頭が出土しており、上溝11号古墳の銀象嵌柄頭とも相前後する時期が想定されることから、両者の間に密接な関係があったことが想定される。

飯田市には古墳が多いが、いわゆる後期群集墳といわれる数十基が群集するような群集墳ではなく、横穴式石室導入以降、前方後円墳を中心とする群構成をなすものと10基にも満たない小単位で構成される小円墳群が存在する。ただし、現状ではそれぞれの群の変遷や関連を十分に把握していない。上溝11号古墳に築造時期が近いナギジリ1号古墳は、天竜川の支流である土曾川の中流域の傾斜面に築造された古墳で、5基による群構成である。いずれも小単位の群構成であるが、上溝11号古墳の場合、前方後円

墳との密接な関係が想定でき、上段の古墳群と強い従属関係にあり、おそらく前方後円墳の築造自体が終息した段階で形成された円墳群といえる。このように、小単位の円墳群の中には、その立地や周辺の古墳群との関係から、その被葬者の背景となる集団の性格・地位は大きく異なると考えられる。このような状況は、当地方の後期古墳のあり方を考える上でも重要であり、最終末のあり方は次の律令時代への移行とも大きく関わるものといえる。

集落との関係では、眼下に広がる比高差10m強ある下段の一帯で確認されている水城遺跡や妙前遺跡内に古墳群形成の母体となる集落が存在することが想定される。

上満11号古墳は、横穴式石室の構造のみならず、後期古墳のあり方を知る上でも重要な古墳といえる。今後、周辺の古墳群や他地域の古墳との比較検討やこれまでに知られている資料の再整理を行う中で、詳細な検討をしていきたい。

参考文献

- 飯田市教育委員会 1987 「塚穴1号・2号古墳」
1998 「ナギジリ1号古墳」
2003 「北本城々跡・北本城古墳」
- 市村成人 1955 「下伊那史」第二巻
- 長野県史刊行会 1983 「長野県史 考古資料編」全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)
- 下伊那地質誌編集委員会 1976 「下伊那の地質解説」
- 岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の巻」について」日本古代文化研究 创刊号
- 石野博信他編 1992 「古墳I 墳丘と内部構造」古墳時代の研究 第7巻 雄山閣出版
- 坂本美夫 1988 「鉢貝塚」齊藤忠 考古学叢考 中巻
- 坂本美夫 1985 「馬具」考古学ライブラー-34 ニューサイエンス社
- 白石太一郎 1988 「伊那谷の横穴式石室」信濃 第40巻第7・8号
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鐵鎌について」権原考古学研究所論集 第八
- 滝沢誠他 1988 「飯田市南部における古墳の実測調査」信濃 第40巻第12号
- 滝瀬芳之 1984 「円頭・圭頭・方頭大刀について」日本古代文化研究 创刊号
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 千賀久他編 2003 「弥生・古墳時代 鉄・金銅製品」考古資料大観 第7巻 小学館
- 西山要一 1986 「古墳時代の象嵌——刀装具について——」考古学雑誌 第72巻第1号
- 松尾昌彦 1982 「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」信濃 第34巻第11号
- 松尾昌彦 1993 「6中部山岳地帯の古墳——長野県を中心として」新版古代の日本 第七巻 角川書店
- 横幕大祐 1997 「いわゆる外護列石について」美濃の考古学 第2号
- 島根県立八雲立つ風土記の丘 1996 「黄金に魅せられた倭人たち」'96特別展図録
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 1996 「金の大刀と銀の大刀」大阪府立近つ飛鳥博物館図録 9
- 総社市教育委員会 1984 「緑山17号墳・すりばち池3号墳・山津田遺跡・清水角遺跡」

付編 上溝11号墳出土装飾大刀の 柄頭に施された象嵌について

御元興寺文化財研究所

尾崎 誠

- ・柄頭に施された象嵌は古墳時代の代表的な技法である線象嵌(糸象嵌)である。

タガネで文様を彫りそこへ象嵌線を埋め込んでいく技法である。

古墳時代の象嵌のほとんどがこの技法である。

- ・いびつではあるが▽の断面形状が確認できる。
- ・めくれあがった象嵌線の一部にタガネの痕跡(曲線部分)が明瞭に確認できる。(巻頭図版5参照)
- ・象嵌線の材質は銀を用いている。
- ・象嵌線そのものの製作技法は不明である。
- ・表面の研磨痕については明瞭な部分が確認できなかった。
- ・文様は山形文もしくは唐草文ではないかと考えられる。

佩表には象嵌が確認できるが佩裏には象嵌は確認できない。欠損によるものか当初から象嵌されていなかったかは現状では判断できない。文様の類例としては奈良県生駒郡平群町にある梨本2号墳(7C初)出土の方頭柄頭や岡山県津山市にある緑山17号墳(6C後半~7C初)出土の柄頭をあげることができる。特に柄頭中央付近の大きく波打ったような文様が、緑山17号墳出土例と類似しており最も近いのではないかと考えている。棟側には2本の圓線にはさまれた4個の円文が確認できる。頭頂部の文様は花文もしくは蓮華文の類ではないかと推察できるが残りが悪く判断できない。

当初は表現方法が簡略された鬼面文の可能性も考えられた。香川県観音寺市にある母神山古墳群(6C前半~中葉)出土の方頭(円頭)柄頭のみが類例と考えたが、母神山古墳出土例ほどはっきりと鬼の顔を表現していないし文様全体が完全に残っていないため、研究所内でも意見を聞いてみたが鬼面文との判断は難しいのではないかといった意見がほとんどであった。

刀身は全長81cm、身巾は約3.5cmを測る。刀身には鞘中金具と鞘口金具、鞘口金具に隠れているが鍔が、柄頭には切羽が残存しておりいずれも金銅製である。

柄頭の形状は方頭とも円頭とも判断の分かれどころである。緑山17号墳出土例についても報告書の中で柄頭の形状については判断を保留している。また緑山17号墳出土例と同様に柄頭には懸通孔が存在しない。

[測定条件]

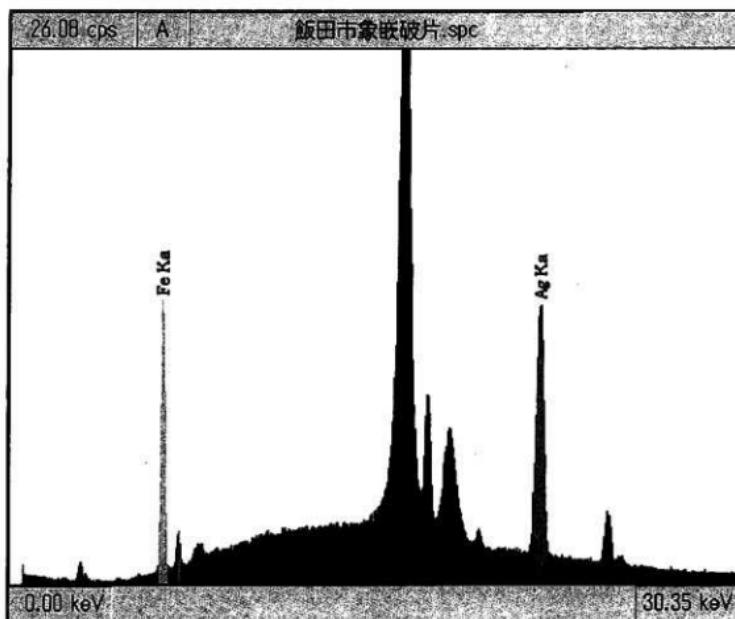
測定装置	SEA5230
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	205
試料室雰囲気	大気
コリメータ	Φ1.8mm
励起電圧(kV)	45
管電流(μA)	20
コメント	

[試料像]



視野: [XY] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	R O I (keV)
26	Fe	鉄	Kα	118.200	6.23-6.57
47	Ag	銀	Kα	237.892	21.84-22.36

挿図25 銀象嵌柄頭の成分分析

写 真 図 版



調査前



同上



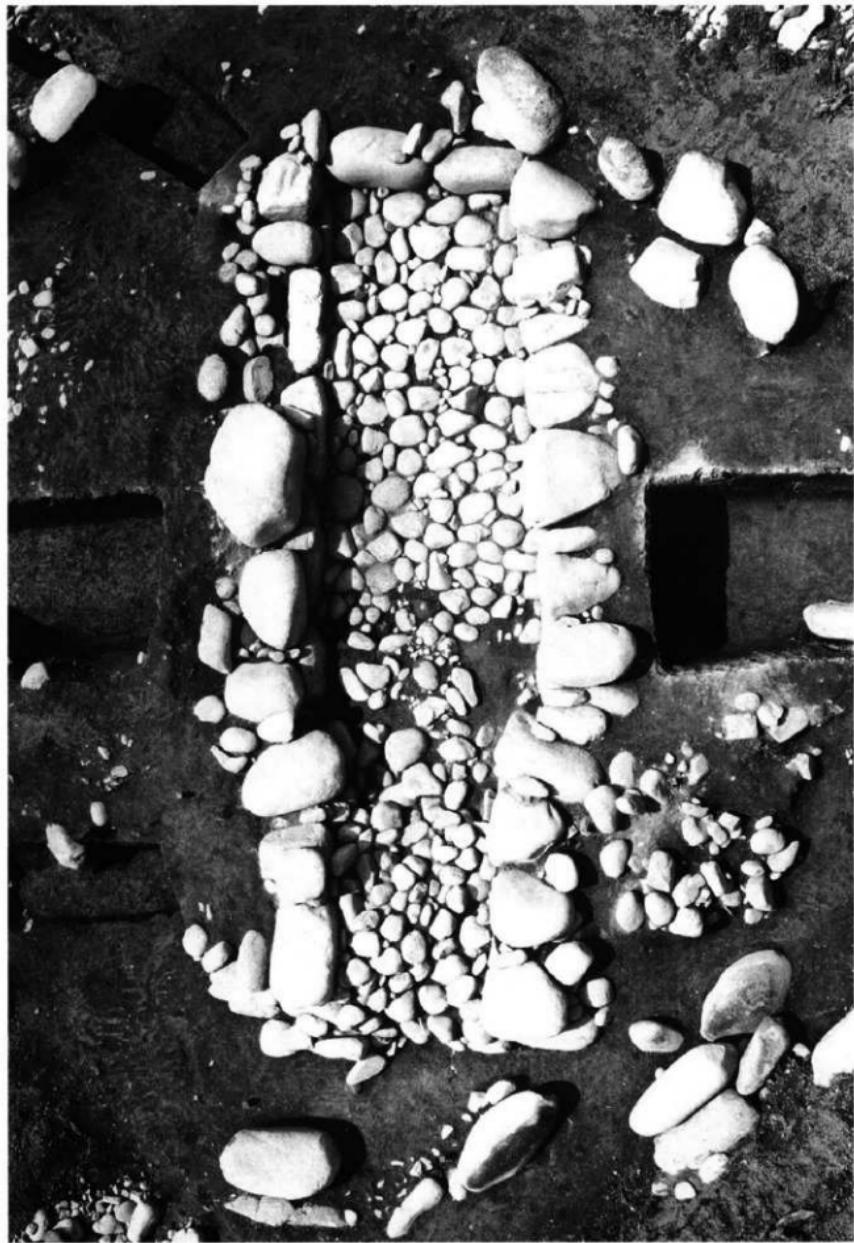
調査開始



横穴式石室検出状況



同 挖り下げ状況



横穴式石室 全景



遺物出土状況（奥壁寄り）



同 上（拡大）



遺物出土状況（奥壁寄り）



同上（装飾付大刀）



遺物出土狀況（渠道部）



同上（擴大）



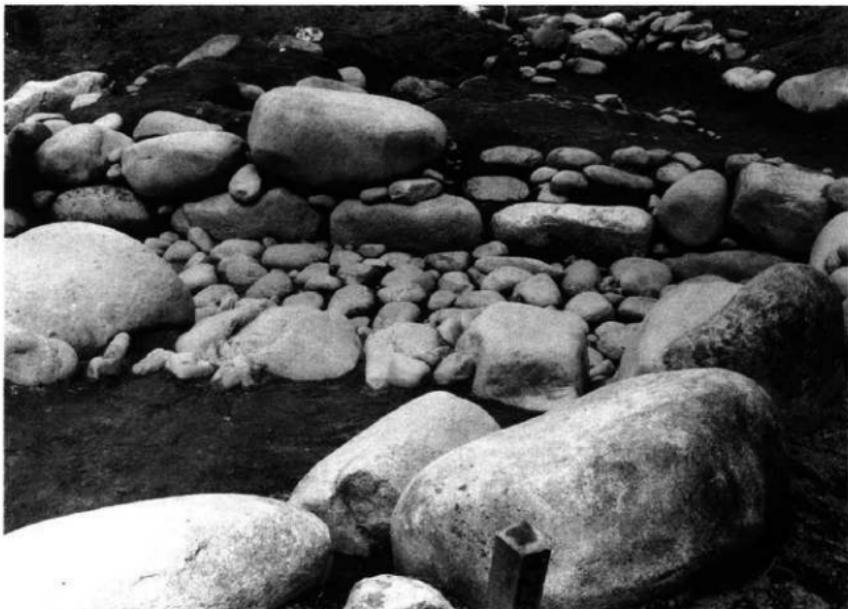
遺物出土状況
(東側壁袖石付近)



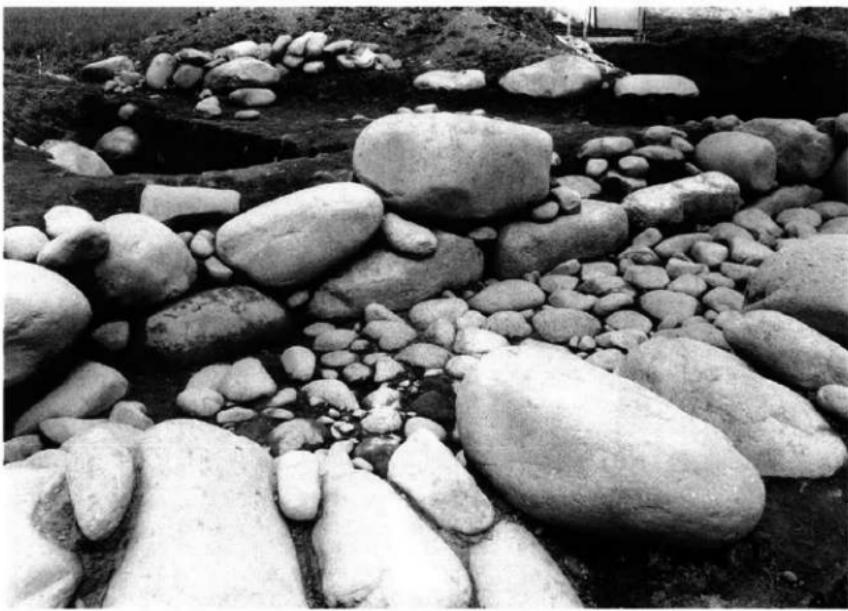
同 上 (奥壁寄り)



遺物検出状況



玄室 西側壁（東から）



同 上（南東から）



玄室 東側壁（北西から）



玄室から羨道部 東側壁（南西から）



奥壁



奥壁北西隅



奥壁北東隅



西側壁 玄室奥壁寄り



同 羨道部寄り



同 玄室から羨道部



東側壁 玄室奥壁寄り



同 渠道部寄り



同 玄室から渠道部



横穴式石室全景（南西から）



同 羨道部開塞石（南から）



渠道部 閉塞石



同 主軸方向の断面



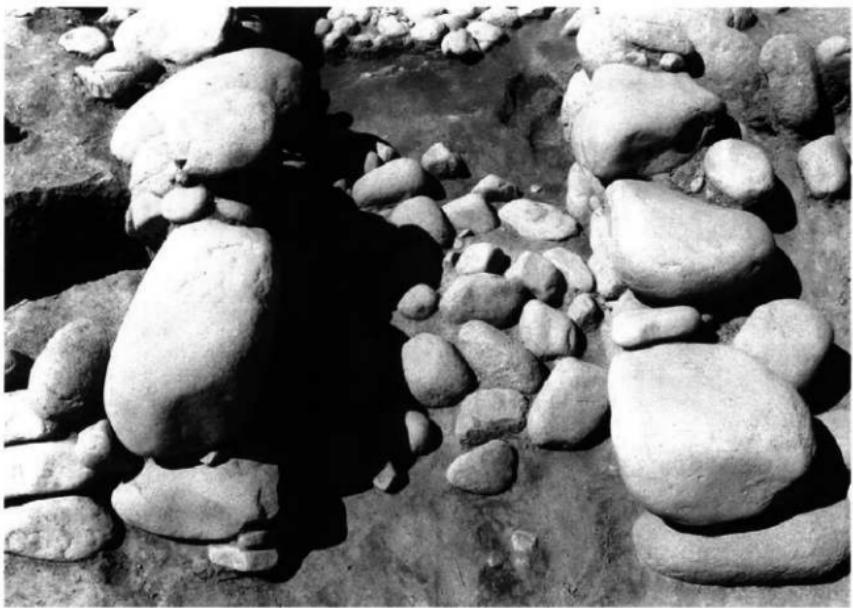
横穴式石室全景（閉塞石上部掘り下げ中）



同上（閉塞石最下段）



閉塞石最下段の状況



同上（拡大）



横穴式石室全景（閉塞石取りはずし後）



横穴式石室全景（閉塞石取りはずし後）



同上（玄室底部石敷取りはずし後）



閉塞石取りはずし後
(南から)



玄室底部石敷
取りはずし後
(南から)



西側壁前端部
(南西から)



西側壁



同 玄室



同 羨道部



東側壁



同 玄室



同 瑞道部



玄室中央D-D' 土層（覆土）



同 上（底部石敷下）



上溝11号古墳 全景（横穴式石室と周溝）



墳丘東西トレーンチ
(西側壁外側)



西側壁外側擾乱



西側壁裏込め



墳丘東西トレンチ
(東側壁外側)



東側壁裏込め



同上



北東側調査区（奥壁外側）



試掘トレンチ（固溝）



周溝（南東側調査区）



周溝（北西侧調査区）



周溝表土剥ぎ



測量調査風景



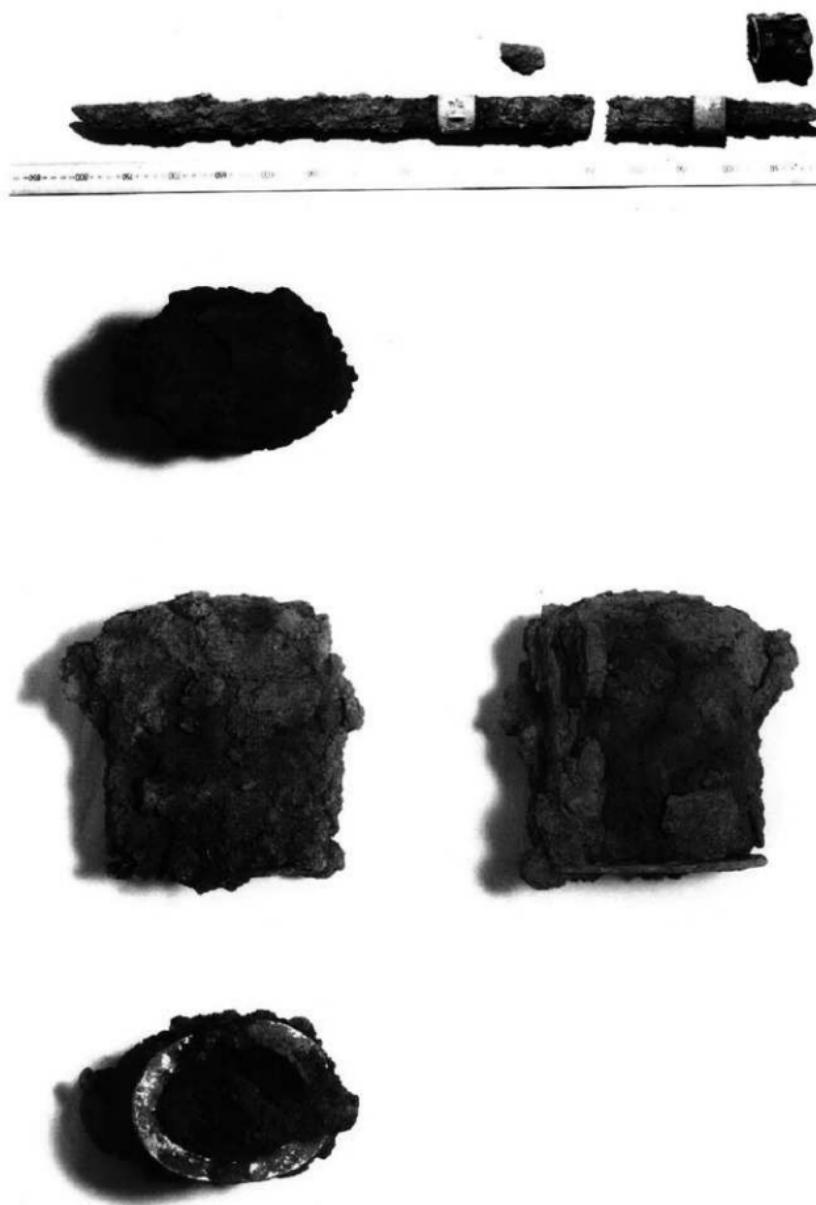
高所作業車による
写真撮影



石室実測風景



現地見学会



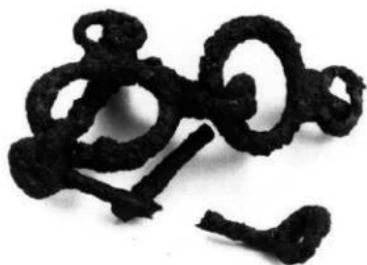
玄室西側壁際出土装飾付大刀（出土時）



玄室西側壁際出土裝飾付大刀（處理後）



玄室北東隅出土直刀



玄室北西側出土櫛



玄室出土鐵鎌



玄室出土鉸具・留金具



玄室奥壁寄り出土土器



玄室中央出土須恵器



同上 須恵器



同 上



玄室北東隅出土須恵器



玄室南東隅出土須恵器



羨道部出土須恵器



同上



同上



同上



羨道部出土須恵器



羨道部出土須恵器



羨道部外側出土須恵器



玄室および石室外出土須恵器・陶磁器

各調査区およびトレンチ出土土器類

報告書抄録

ふりがな	あげみぞじゅういちごうこふん						
書名	上満11号古墳						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	瀧谷恵美子 羽生 俊郎						
編集機関	飯田市教育委員会						
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel 0265-22-4511						
発行年月日	西暦2004年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 35° 30' 56"	東経 137° 51' 30"	調査期間 平成14年 5月14日 ～ 7月24日	調査面積 (m ²) 121m ²	調査原因 農地造成・ 宅地開発
上満11号古墳	飯田市 松尾上満 3329・ 3327-2	20205					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上満11号古墳	古墳	古墳時代	円墳 横穴式石室	古墳時代土師器・ 須恵器・金銀製品・ 陶器・磁器	両袖式の横穴式石室 柄頭に銀象嵌を施した 直刀が出土		

上溝11号古墳

2004年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
長野県飯田市教育委員会

印 刷 株式会社 秀文社
